藝文京

Kyoto Arts and Culture Foundation

京都市芸術文化情報誌

特集

いま／これから

～協会創立40周年からその先を見据えて～

2021

通巻140号

公益財団法人京都市芸術文化協会

京都市芸術文化情報誌 藝文京 二〇二一（一四〇号）

公益財団法人京都市芸術文化協会

MAEDA'S COFFEE

Made in Kyoto since 1971

室町本店 MUROMACHI HONTEN

京都市中京区蛸薬師通烏丸西入橋弁慶町２３６番地
■営業時間／７:00～18:00 ■定休日／なし
■TEL／075-255-2588

高台寺店 KODAIJITEN

京都市東山区下河原通八坂鳥居前下ル南町４１５番地
■営業時間／7:00～18:00 ■定休日／なし
■TEL／075-561-1502

明倫店 MEIRINTEN

京都市中京区室町通蛸薬師下ル京都芸術センター内１F
■営業時間／10:00～20:00 ■定休日／芸術センター休館日
■TEL／075-221-2224

文博店 BUNPAKUTEN

京都市中京区高倉通三条上る東片町623-1
京都文化博物館別館内１F ■定休日／月曜日
■営業時間／10:00～19:30 ■TEL／075-255-1221

御池店 OIKETEN

京都市中京区衣棚通御池下ル長浜町159 イーグルコート烏丸御池１F ■定休日／なし ■TEL／075-252-1515
■営業時間／月～土曜 9:00～19:00 日祝 8:00～19:00

元離宮二条城和楽庵 茶房 前田 SABO MAEDA

京都市中京区二条通堀川西入二条城町541 二条城内
■営業時間／9:30～16:30 ■定休日／二条城休城日
■TEL／075-823-0223

NOKUCAFE NOKUCAFE

京都市中京区烏丸通丸太町下ル大倉町205-1
NOKU KYOTO１F ■定休日／なし
■営業時間／モーニング:7:00 ～ 10:30
ランチ・喫茶:11:00 ～ 17:30 ■TEL／075-256-1223

京博店 KYOHAKUTEN

京都市東山区茶屋町527 京都国立博物館内
■定休日／月曜日 ■TEL／075-533-6262
■営業時間／火・水・木・日 9:15~17:00 金・土 9:15~20:00
※博物館の開館時間に準じる

マンガミュージアム店 MANGA MUSEUMTEN

京都市中京区烏丸通御池上ル（元龍池小学校）
■定休日／水曜日 ■TEL／075-251-8811
■営業時間／9:00 ~ 18:00

前田珈琲

www.maedacoffee.com

藝文京

Kyoto Arts and Culture Foundation

京都市芸術文化情報誌
2021
通巻140号

目次

〈特集〉いま／これから〜協会創立40周年からその先を見据えて〜
中長期ビジョン策定プロジェクト … 2
「より人間的な社会をデザインする」 近藤 誠一 … 3
リレートーク「藝・文・京」Ⅱ
「成熟社会における暮らしと文化・芸術」… 6
「まだ見たことがない世界をすすんでいくために」 荒川 崇志 … 15
京都芸術センター開設20周年記念「We Age」… 18
「節目の年にあたって」 建畠 哲 … 22
リレートーク「藝・文・京」Ⅲ
「京都文化への視座〜京都文化の過去・現在・未来を考える」… 25
リレートーク「藝・文・京」を振り返って
「分断の時代に、それでもなお」 渡辺 健一郎 … 34

〈芸文協事業紹介〉
京都市芸術文化協会賞・新人賞 … 38

〈リレー随想〉
「コロナ禍における建築家」 衛藤 照夫 … 40

〈芸文協事業紹介〉
会員の活動報告　廣 青龍『智恵子抄そして愛』発行 … 43

〈トピックス〉
KYOTO ART BOX フルリニューアル！ … 44
前田珈琲明倫店リニューアル・オープン！キッチンが tower !? … 46

〈ふりかえり〉
「芸文協40年のあゆみ〜京都市文化行政とともに〜」 中谷 香 … 49

〈編集後記〉 辻 喜代治 … 48

いま／これから
協会創立四〇周年からその先を見据えて

世界が未曾有の災害に直面することになった二〇二〇年～二〇二一年。京都市芸術文化協会（以下、芸文協）はその最中に、指定管理者として運営する京都芸術センターの二〇周年（二〇二〇年四月）を迎え、まだまだ先の見通しが立たない中、二〇二一年九月には創立四〇周年を迎えます。コロナ禍における様々な制限に向き合いながら、芸文協では、文化や芸術に携わる人に必要な支援を届けられるよう、京都市の各機関と連携して奨励金・補助金の窓口を担い、実態調査や相談窓口開設等に取り組んできました。一方、未だ多くの事業について延期・変更・中止を余儀なくされる状況が続いています。

奇しくも、創立四〇周年に向けて芸文協の歴史をふりかえり、その役割の再考に取り組もうとしていた矢先に、私たち自身だけでなく、社会全体が急激な転換期を迎えたことは、これまでの価値観を問いなおすことにもつながりました。

今号では、芸文協のいま／これからについて議論を重ねる「中長期ビジョン策定プロジェクト」の様子を中心に、〝「創造力」と「想像力」が暮らしに息づく社会〟とは何かについて模索を続ける経過を、特集としてお届けします。

より人間的な社会をデザインする
―中長期ビジョン策定にあたって―

近藤誠一（京都市芸術文化協会理事長）

京都市芸術文化協会（以下、芸文協）の中長期ビジョン策定においては、これまで経験したことのない真剣で幅広い議論が行われた。そのブレーンストーミングのプロセスに関わりながら感じたことを述べてみたい。

時代が大きく変わろうとしている。そのような時、われわれは大局観をもって歴史を見つめ直し、その流れの中に自らを正しく位置付けることで、よりよい未来をつくることに心がけなければならない。人類は七〇〇万年前に誕生して以来、道具の利用、火の使用、農業・牧畜革命、産業革命などを経て、社会の統治（政治）や富の創造（経済）のシステムを、試行錯誤を経ながらも進化させた。それは科学技術の力のお陰もあって大きな繁栄をもたらし、民主主義と資本主義という、合理主義に基づく普遍的な理念体系によって確立したかに見えた。

ところが最近、繁栄の陰でこれらのシステムが制度疲労を起こしている兆候が見え始めた。その要因は、この制度を使う者（政治家や企業家）も、使われる側（一般国民、消費者）も、所詮人間と言う非合理的な（少なくとも理念が想定しているように常に合理的に判断し、行動することはできない）存在であるという単純な事実である。文明は発達したが、利己主義、我儘、差別、妬み、分断という人間の醜い性格は全く改善していない。むしろそれらのために制度が悪用され、それが不公平や格差を生んで、折角つくった制度への信頼感を弱めているのだ。そしてそうした事態が起こっていることを国内ばかりか国際関係において露わにしたのが、新型コロナウィルスの世界的感染拡大である。

人間とはどのような存在であるのか、その長所と欠点はどこにあり、いかにして長所を伸ばして政治や経済の制度を適切に運営すべきかが問われている。そこで重要な役割をはたすのが、人間のもつ共感力、協調の精神である。そしてそれを磨いてくれるのが文化芸術である。科学技術の進歩による政治・軍事や経済システムの改革に引きずられて見過ごしてきた、人間性の進歩（少なくとも退歩を防ぐこと）にこそ社会は注目をしていかねばならない。

ヌスバウム(1)教授は、民主主義を健全に運用するためには、人文学や芸術が不可欠だと述べる（マーサ・ヌスバウム『経済成長がすべてか―デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店／二〇一〇年）。自分中心ではなく、他人のこころを相手

の中に入って理解する努力をして初めて、建設的な意見交換や多数決に従う心構えができる。政治や経済の世界では他人は常に自己の利益に照らして有益か否かで判断する傾向が強くなる。つまり利益のために一緒に組める同志か、ライバルかという功利主義的視点である。それでは民主主義は機能しない。

文化芸術の役割を語るとき、これまではひとの「こころを癒し、安らぎを与える」という決まり文句が多かった。そのこと自体間違ってはいないが、同時に文化芸術には、個人の幸せを超えて、他への許容性、連帯意欲、多様性の受容などに必要な共感力を養う力がある。そしてその結果として社会をデザインし、イノベーションを進めるという、極めて建設的な役割がある。今回の中長期ビジョンのブレーンストーミングで、こうした意見が多数出てきたことに大変勇気づけられた。コロナ対策として必要なステイホームや三密の回避によって、日常生活における他とのつながりを絶たれることがもたらす不安と閉塞感が、多くのひとびとにこの気づきを与えたのかも知れない。

いまこそ文化芸術の建設的な役割を認識し、時代の転換が一部の権力者の意向や、AIによる機械的な提案に引きずられることなく、市民が連携によって正しい方向に進むことを確保しなければならない。コロナを乗り切った時の社会が、文化芸術の力を前向きにとらえ、活用するものになって欲しいと思う。

しかしコロナの感染防止が課するさまざまな制約の中で、アーティストたちに何ができるのだろうか。ここで最近知ったいくつかのエピソードをご紹介しよう。

まず第一は十四世紀のヨーロッパで起こったことである。黒死病と呼ばれたペストが大流行し、三人にひとりが亡くなるという大惨事を招いた。その時生まれたのが、ボッカチオ(2)の書いた『デカメロン』という物語集である。フィレンツェの裕福な男女十人が、感染から逃れるために郊外の別荘に移り住んだ。そこで退屈しのぎに毎日ひとりづつ、つくり話しを紹介した。この作品はそこで語られた百の物語をまとめたもので、原題の意味はまさに『十日物語』だ。そしてそれまでの欧州の文学作品が韻文で書かれていたのに対し、これは初めて散文で書かれ、その後の欧州の散文小説の範となった。ペストという制約の下で、男女の悲喜劇が散文で描かれることによって多くの市民に読まれることになるという、文学史上画期的なことが起こったのだ。

もうひとつは美術分野で起こった。それまで美術と言えば壁画や大聖堂のような建築物が主であった。人々は芸術を求めてそこに集まり、鑑賞した。しかしペスト感染拡大を防ぐために集まることを禁止されたひとびとは、次第に自分の家で鑑賞し、避難する際には持って出ることができるようなポータブルな絵画や工芸品に芸術を求めるようになったと言う。いまでは小説と言えばほとんどが散文で書かれ、芸術作品は持ち運びできるものが多くなり、それが庶民が芸術を楽しむために重要な役目を果たしているが、これらはいずれもペストという厄災にあっても何とか美を追求し続けようとしたアーティストの信念がもたらした大きな転換だったのだ。

さらに演劇の世界で起こったこともある、西欧では演劇といえば何といってもギリシャ悲劇が中心で、長らくそれを超えるものは現れなかった。しかし十六世紀に現れたシェークスピア(3)が画期的な変革をもたらした。そしてそれは当時も流行ったペストが重要な役割を果たした。ギリシャ悲劇では、人間はすべて神の創造物であり、すべての個人は予め運命が定められていると考えられていた。しかしペストの最盛期には劇場が十四ヵ月にわたって閉鎖され、この疫病が身分の上下や性別、貧富の差を問わず蔓延したことから、シェークスピアはひとりひとりには身分や生まれを超えた自由な個性があり、その発露がさまざまな人間的ドラマを生み出すものと考えて、登場人物や話の展開を考えた。例えば四大悲劇の一つ『マクベス』に登場するマクベスもバンクォーもいずれも見かけや身分はスコットランドの将軍だが、その性格が全く異なるように。

以上のようにかつての芸術家は、パンデミックという大惨事の中にあっても、真善美の追求という使命を諦めることなく、新しい時代の流れを読み、それに合わせて芸術の表現やあり方そのものを変えてきたのだ。人間はどんな困難に直面しても、美を追求し、自分の信念を貫き通そうという飽くなき情熱と使命感をもつ限り、必ず出口を見つけ、それが芸術界を大きく転換させてきたのだ。

今回のコロナへの人類の対応がどのようなものになるかはまだ分からない。デジタル化が進むことは間違いなさそうだが、そこで生まれる「新しい生活様式」とは、人間にとってどのようなものになるのか。行動様式に大きな変容を課するであろう新たな社会の規範づくりを、テクノロジーの進歩に任せていてよいのだろうか。文明の発展の陰でやや蔑ろにされてきた人間性について改めて考え直し、より人間らしい、人間がこころから豊かさを味わえる社会に変えて行く努力を意識的に進めて行かなければならないのではないだろうか。そこに果たす文化芸術の役割は極めて大きい。そしてテクノロジーはそれを達成するための手段として有効に使うことができる。人類の歴史を振り返ることで、いまは極めて重要な時期にあることが分かる。何をしなければならないか、何が将来の世代に評価される改革なのかをじっくりと考える機会を、コロナが与えてくれたのだ。芸文協の中長期ビジョンもこうしたマクロ的な流れの中でとらえ、将来世代への明確なメッセージとなることをこころから願っている。

註釈

(1) マーサ・クレイブン・ヌスバウム(一九七四〜)哲学者・倫理学者。シカゴ大学教授。

(2) ジョバンニ・ボッカチオ(一三一三〜一三七五)イタリア・フェレンツェの詩人・散文家。

(3) ウィリアム・シェイクスピア(一五六四〜一六一六)イングランドの劇作家・詩人。

成熟社会における暮らしと文化・芸術

ゲスト
加藤 博史
（社会福祉学者、龍谷大学名誉教授）
菅原 直樹
（俳優・介護福祉士、「老いと演劇」OiBokkeShi主宰）
宗田 好史
（都市建築学者、京都府立大学教授）
聞き手
山本 麻友美
（京都芸術センター チーフプログラムディレクター）

日時：二〇二〇年二月十七日（月）
会場：京都芸術センター 講堂
主催：公益財団法人京都市芸術文化協会

老いや死は、自分に対しても、親に対しても、知らない誰かに対しても平等に訪れる。それは誰もが必ずいずれ向き合わねばならない「厄介事」である。近代社会はこの厄介事を、介護施設や病院、あるいは葬儀といった社会システムに任せることで簡略化（矮小化）してきた。お金を払って老いと死を隔離すれば、そこから目を背けることができる（と考えられてきた）。しかしとりわけ日本では、超高齢化が進行し、近いうちに「多死社会」が訪れるという。隔離の場は飽和し、システムは瓦解する。再び死が眼前に戻ってくる。

今回のリレートークは、この苦境を受け止めつつ、その上でそれを逆に好機ととらえることができないだろうかというものであったように思う。老いや死を、厄介事として排斥するのではなく、それに改めて向き合い、ある種の人間の本質として引き受けること。そしてそれによって今ある生を捉え直すこと。それによって、近代社会が失ってしまった人間の本来性を再考することができるのではないか——登壇者の三名には、芸術や哲学を通じて、その可能性を垣間見せていただいた。

会の後半では、ご来場の方々に講演の話を受けて考えたことを話し合ってもらった。年齢や立場、障がいの有無などによって、我々は互いに異なる世界を観ている。それでもなお共に生きていかねばならない。語り合わねばならない。そのために芸術が、我々ができることとは何か——登壇者のお話は勿論、参加者の皆様の熱気のこもった意見をうかがって、そのための確かな「第一歩」を感じられる会となった。

採録・構成　渡辺健一郎

「老い・ボケ・死」とともに暮らすために

菅原

OiBokkeShi（老い・ボケ・死）という劇団を主宰していて、岡山県で活動を行っています。二〇代から老人ホームで働き始めたんですが、多くのお年寄りと接しているうち、実は老い・ボケ・死には豊かな世界があって、それと向きあうことで前向きになれることもあるのではないか、と思いました。老い・ボケ・死を隔離するのではなくて、芸術・文化を通じて、それを地域で受け容れられる文化を創出するお手伝いができたらと活動をしています。

二〇一四年、劇団の活動の第一弾、介護者向けの「老いと演劇のワークショップ」を行いました。参加者に八八歳のおじいさんがいました。その人は同い年の妻が認知症を患っていて長年介護をしているが、新聞の告知を読んで一時間半くらいかけて来たと。歩く姿がつらそうでしたし、耳が遠くてコミュニケーションが難しかったので、結構運動量の多いこのワークショップ（以下、WS）に参加するのは難しいかなと思った。ところが、演技をやらせるとまさに水を得た魚だったんですね。さっきまで耳が遠いと思っていたのに、芝居が始まると耳が良くなる。「どっちを演じてたの」みたいなことになった。話を聞いたら、定年退職後に憧れだった映画俳優を目指して、今村昌平監督の映画にエキストラで出演したこともあるらしい。これが劇団の看板俳優、岡田忠雄さんとの出会いです。それから五年間、今も現役で俳優として活動

してもらっています。

最初は彼の家にいってひたすら話を聞きました。介護の話から、戦争の話まで。そして妻が認知症を患って、徘徊をして困っていると聞きました。じゃあ演劇を通じて徘徊とは何かを考えてみよう、と立ち上げたのが徘徊演劇『よみちにひはくれない』でした。徘徊演劇なので、外で、商店街で上演しました。二〇年ぶりに帰省した青年が、昔可愛がってくれた近所のじいちゃんと再会。最近妻が認知症を患って、今も徘徊して探しているんだと聞き、青年が商店街におばあさんを探しに行くというストーリーです。

商店街でやったお芝居なので、通行人が俳優に見えたり、町の音が演劇のBGMに聞こえたり、何がフィクションで何が現実なのか、その境界があいまいになっていく。話が進むにつれて、実はおばあさんが既に亡くなっていて、そのショックからおじいさんは認知症を発症、いないおばあさんを探しているっていうことが分かってきます。お客さんがそれを通じて認知症の人が観ている世界を想像できれば、というお芝居でした。

最新作は、去年の十一月に上演した『認知の巨匠』。五年間で岡田さんも歳をとって、できないことが増えてきた。しかし「認知の巨匠」では、もっと台詞をくれということで上演時間二時間半のうち、二時間しゃべりっぱなしでした。歳をとっても、信頼できる人、自分の好きなことを共有してる誰かが現れると、お互いに何か自分の引き出しを開け始めるんですよね。こんなこともできる、こんなこともやりたいと、信頼関係を築けているメンバーの中では、どんどんできることが増えているんですよね。これは演劇に限ったことではなく、介護やその他色んなことに通用することなんだと思います。

最後に、介護者向けの俳優WSで話している内容を紹介します。見当識障害、記憶障害などの中核症状があるから認知症の人におかしな言動があるのは仕方がない。しかしそれを介護者が訂正したり失敗を指摘したりしていては、認知症の方々はかなり傷ついてしまう。なので認知症の人と関わるときには、その人が観ている世界を尊重して、僕らの常識からすると間違ったことを時には受け入れたり、僕らには見えないものも時には見たふりをすること。そういう演技が結構必要になってくるんじゃないか。

昼の老人ホームの居室。介護職員がご飯の時間ですよと声をかけても、認知症のおじいさんが「これから仕事だ、スーツを着なきゃ」って言ったりして応じてくれない。彼が元サラリーマンで出張が多い生活をしていたが、まだ老人ホームに入って二週間しかたっていないという場合に、ここどこだ、そうだ出張でホテルに泊まっているんだと勘違いするかもしれないですよね。そこにガラガラっと扉が開いて、ごはんの時間ですよって言われてもコミュニケーションは成立しない。

相手の世界を無視して「現実」に引きずりこもうとしても、言い争いの様になってしまいます。そうではなくそれを尊重して「じゃあスーツ探しましょうか」と話をあわせると、自然とお互いに信頼関係が生まれて、「私探しますんでごはん食べましょう」と言うと結構応じてくれたりするんですよね。

中核症状は、認知症には必ず伴いますが、一方、行動心理症状は置かれている環境や個人によって、生じる生じないがある。中核症状は仕方のないことですが、無視とか否定といった不適切な関わり方をすることによって、感情が傷ついて、BPSD（行動・心理症状）が発症するんじゃないか。WSでは、認知症の人の役として否定や無視をされる経験もしてもらいます。そうするとここは居場所じゃないんだ、外に出ようと思ったと、感想でおっしゃって下さいます。逆に言えば人間だれでもそういう状況に陥ったら、行動・心理症状を発症するっていうことですね。こういったWSをやっています。

悲しみを深く味わい、楽しむ文化

加藤

私が勤めていた龍谷大学に、知的障害の重い方も含めた方々が通ってこられて、学生と一緒にお芝居を創ったり音楽を創ったりする、「ふれあい大学」という名前の授業があります。障害のある方が大学という若者文化の中に通ってきて、学生が触れ合う機会を持てるという意味で、非常に意義のある活動です。その中に、重症心身障害の施設に入所する女性がいます。体幹は一切動かすことができなくて、特注の車いすに乗って全部介助されている方です。そんな人が四年間通ってきて、お芝居をされる。彼女を介護しているヘルパーさんに言わせると、「ふれあい大学」のある日はオーラが違う、言葉は出ないけどいきいきとしているのが分かるっておっしゃるんです。重い障害のある人の人間

菅原直樹氏

的な価値っていうのはいったい何なんなんだろうか。それは「できる、できない」っていう価値ではなくて、「あることそのもの」の価値だと思います。「一〇〇点をとった〝から〟可愛がる」などといった条件なしに、生きてることそのものを大切に思う。その大切に思う／思われるという体験こそが、共に生きていくことの核心だろうと思います。

次に、日本を代表する哲学者の中村雄二郎という人が、今の社会に失われているのは、パフォーマンス：身体、シンボリズム：意味・物語、そしてコスモロジー：宇宙も含めた自然の世界であると言っています(1)。私流に言い換えると、「身体を使っての体験と表現」、「意味の世界、言葉化する前の世界との交歓」、「星の時間、悠久の感得」ということ、つまりアートの世界です。これらは、かつて当たり前だったけれども、失われてきている。演劇や芸術、あるいは信仰も、この三つで成り立っている。京都はこのコスモロジー、パフォーマンス、シンボリズムの伝統が、非常に分厚くある、そういう世界ではないかなと思います。しかし、イギリスのアンソニー・ギデンズという社会学者が、現代社会は「経験が隔離」されてきているということを言っています(2)。先ほど菅原さんからも老いやボケを隔離するという話がありましたが、年寄りはボケたり病気になったりすると、病院や施設に送られる。死ぬ前になると、家庭で頑張ろうとしても結局病院に行くしかないとなったりする。その後は葬儀会社が上手に死体を処遇してくれる。老いや病や死の経験が隔離されてきていて、暮らしの中で経験することがなくなった。これは恋愛や性愛の経験もそうだし、子どもを育てるっていう経験もそう。色んなプロに任せていってしまう。昔の学校の先生は、生徒が悩んでいたら一緒に真剣に悩んでいましたが、今は何かあったらすぐスクールカウンセラーに任せてしまうんですよ。「老い」に関しても、苦しみや悲しみをいっぱい経験しないと、年齢を重ねるだけでは「成熟」はできません。実体験を、色んな形で取り戻していくっていうことも必要じゃないかなと思います。先ほど菅原さんが、認知症は隔離するものではなく生かすものだ、そして相手の観ている世界に寄り添うものだとおっしゃいました。この京都芸術センターでは、薬物依存症リハビリ施設「京都ダルク」と一緒になってお芝居やダンスを作り出した(3)という。そういうことがもっともっと、この社会の中に、我々の生活に仕掛けられていく必要があると思います。

加藤博史氏

日本は「悲しみの文化」を大切にしてきました。心の世界のことを一生懸命研究した精神科医のフロイトという人が、悲しいことがあったときに、しっかり悲しまないとうつ病になってしまうという論文を書いています(4)。統合失調症やうつ病になりやすい人は、甘えることを悪いことだと考え、恐れている。だから助けてと言えない。「憂き我を　さびしがらせよ　閑古鳥」という芭蕉の句があります。うっとうしい自分を、寂しさが逆に救うということ。ある意味で悲しみを深く味わい、楽しむ文化ですかね。傷つくことができる心、中井久夫（精神科医）はこれを「ピアニッシモの心」と表現していますけれども、だんだんそういう心が追いやられるような文化が広がってきていると思うことがあります。芸術を通して、ピアニッシモの心を持った人達を、社会の真ん中に置くような、共に生きていけるような、そういう地域や社会が創られていったら良いなと思っています。課題として、受けとめていきたいと思います。

社会の成熟と文化―老いや死との関わり方から

宗田

二〇世紀以降になって日本では特に、歳をとっても「若作り」をするっていうことが国民的な使命のようになってきています。だから、若くなくなってしまったということで落ち込んでしまう方がいます(5)。どう歳をとり成熟するかということと、「失われた三〇年」の間の色んな社会的変化に伴って生じてきている問題とを関連付けて、お話してみたいと思います。

我々の平均寿命は急速に伸び、五〇歳を超えたのは第二次世界大戦後。一九五〇年代に六〇歳になった。それが今や、八〇～九〇歳になってきた訳ですが、この二〇～三〇年延びた人生をどう過ごすか。お金があって健康で、友達もたくさんいれば良いという風に捉えるのか、それとも老後こそ社会貢献をすべきだとするのか。実際に七〇代の後半でもＪＩＣＡの海外協力隊で、発展途上国で活動されている方たちがたくさんいます。決してそうしろと言うのではなく、今の社会は様々な立場の方が混在しているということです。従来のような社会の仕組みや価値規範は変わってきています。年配の方の経験や知恵が、そのままでは活かしづらくなっていて、若い世代に伝えるためには上

手に現代化して、翻訳して語っていく必要があります。

私自身も、母を施設に入れるっていうことに関して、弟とかおばとか、隣近所の人達と、随分話をしました。同時に、介護難民や、老老介護で倒れるかたもおられます。私は今とても恵まれた状況にあると思って感謝しておりますが、こういう現状が、なかなか社会で理解、共有されていない。しかし皆で考えなければという時期だと思うんです。

例えば家族親族の中でどう歳をとっていくか。子どもに迷惑をかけちゃいけないから「私、特別養護老人ホームに入るね」と言う。しかしそれを言われる子どもも困ります。果たしてそれで良いのか。逆に家にいたいからあんたが地元に帰ってきなさい、と言われてもちょっと困る。じゃあどうするか。高齢者が従来よりも長く生きているという誰も経験したことのないこの時代、歳をとるとはどういうことかを改めて考えなければならない。肉体の成熟よりも精神の成熟ですね。学習と経験によって、いままでの若い時のような行動をせずに、十分熟達している豊かな中身を持つような、ちょうどお能の所作、お茶の所作にあるような、考え抜かれて洗練された、研ぎ澄まされた、行動が必要なのではないか。

死亡数の増加や死亡率の上昇の問題もあって、二〇三〇年くらいから、年間約一六〇万人以上の方が亡くなる多死社会の時代がきます。そうなると火葬場が十分あるか、ご遺体を安置する場所はどうかという問題も出てくる。今、墓地、埋葬の多様化、簡素化が進んでいます。あるいはまた家族葬が多くなり、香典が要らないといった葬儀の簡略化も進んでいます。それから最期の看取りが合理化されています。ここが、成熟っていうことの熟慮が試されることだと思うんですよ。戦後から今まで、日本では病院死が増え続けていますが、今後は病院だけでは大変で、在宅や施設ではどうだ、ということが進んできている。どういう施設を用意し、どういう場所でどう亡くなるかというのは、個人の問題に限らない、社会全体の問題です。

過疎化が進んでいる地域では、家を閉じ、親族を整理し始めている。墓や仏壇から始め、徐々に親から受け継いだ土地だとかを整理し、資産を除去していく。また、隣近所の付き合いをたたんで、地域活動を縮小、若い移住者にゆずるなりして、都会の孫子とのつながりが模索されている。

宗田好史氏

また住んでいる町を維持するっていうことは難しいですし、無理にしない方が良いですから、居住人口は無理でも通住人口、通ってくれる人を増やすといった様に、たたみかたを上手にしていくっていうことが「コンパクトシティ」という考え方です。

ここから、人生のたたみかたについても最後に考えてみます。万葉集で言う「相聞歌（そうもんか）」のような恋の歌から、我々は恋愛のことを学びましたよね。ただ同時に「挽歌」の様に、どう老いるか、人をどう送るかということも芸術作品の中では沢山描かれている訳です。歳とった方たちの幸せそうな絵であったり、キリストの亡骸を抱えて泣いている聖母マリアの表情から、何を我々が読み取るかっていうのも大事なことです。また芸術ということで、自分を磨く教養としてではなく、本当に死が怖い、老いていくことが嫌だ、でもそのことに腹の底から何か深い感動を与えてくれる、そういうアートに関心があるんじゃないか。皆が幸せに老いて、亡くなっていくわけではない。皆が立派な子どもを持っている訳でもお金がある訳でもない。それは寂しいけれども、それを上手く表現し、文化にしていく。老いた寂しさ、腹立たしさ、むなしさ、怒りを文化にするということ。それが多分、成熟っていうことだろうと思うんですね。

註釈

(1) 中村雄二郎は各所で演劇の、あるいは人間の根源にこの三項を位置付けている。中村雄二郎『臨床の知とはなにか』（岩波書店、一九九二年）など。

(2) アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会』（二〇〇五年）

(3) akaliike公演「眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に光あふれるように、永遠に続く気が狂いそうな晴天のように」（二〇一九年、京都芸術センター）

(4) ジークムント・フロイト『喪とメランコリー』（一九一七年）

(5) 熊代亨『若作りうつ』社会（講談社現代新書、二〇一四年）

まとめに代えて ―会場の声を受けて―（抜粋）

菅原

二年前、老人ホームでお芝居を上演しました。芸術作品を観て、色々感じたことを話し合ったり、出会ったりする場が重要で、もしかしたら老人ホームが地域の老いの文化拠点みたいな感じになることもできるのではないかと感じました。

海外の事例では、オランダのホブウェイ［Hogeweyk］という介護施設は六つの棟に分かれていて、入居者の関心によって住む棟が変わる。音楽が好きな人はこの棟、料理が好きな人はこの棟、という風に。またイギリスのある市が

デイサービスを劇場に依頼した。日本のデイサービスのレクリエーションは「ちいちいぱっぱ」的なところがあって、嫌がられる場合もありますが、この例では芸術家が一緒になって劇場で本格的な舞台作品を作ったりする。

人手不足の介護施設は、効率優先で文化的なものをどんどんそぎ落としてしまいます。よりおいしくご飯を食べ、より気持ちよくお風呂に入るといった「文化」も含めて。老人ホームや介護の現場に芸術・文化の視点を取り入れるだけで、大分雰囲気は変わってくると思っています。

加藤

淀川キリスト教病院のホスピスをなさっていた柏木先生から直接聞いた話ですが、死ぬときにあたたかいものを残して死んでいく方と、冷たい何か怖いものを残して死んでいく方がいると。その違いは、その人が生きてきた姿そのものだったとおっしゃっています。あたたかいものを残して亡くなる、それは我々が老いていくことの最後の仕事ですが、それはまわりの人の幸せを自分の幸せと思えるかどうかに尽きるんではないかなと思います。

宗田

親の介護を自分でしないことに後ろめたさを覚えるということの背後には、時代における規範のずれがあります。規範がずれた時に、古い規範と自分を比べて、後ろめたさを感じる訳じゃないですか。しかし「あなた」を犠牲にしてまで守らなきゃいけない規範なんてない。あなたの幸せが一番大切なんだと、周りが皆思っているという、そういう社会であって欲しいなと思うじゃないですか。それでいくと、菅原さんの「老人介護の現場に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを」っていうキャッチフレーズですが、これだけ日本全体で抱えている老いやボケや死の問題を、アートのレベルにまで高めたっていうのはすごかったです。

※芸文協ウェブサイト「活動レポート」では、リレートーク「藝・文・京」I～IIIの記事をご覧いただけます。

まだ見たことがない世界をすすんでいくために

―ビジョン策定のプロセスを伴走して―

芸文協のこれからを思い描き、目指す姿を実現する組織力を育むために、中長期ビジョン策定の過程ではプロジェクト委員を中心に多様な対話の場を設け、意見交換を積み重ねています。

それら対話の場のコーディネートを担当していただいた「場とつながりラボ home's vi」の荒川崇志さんに、組織にとってミッション(理念)やビジョン(理想とする光景)がどんな役割をもつのか、その実現のためにどのようなアクションが必要とされるのかについて、第三者の立場からご紹介いただきます。

ミッション・ビジョンの役割

荒川 崇志(場とつながりラボ home's vi)

組織は、人が集まって体系だった構造や人が有機的に動くためのシステムを構成し、アクションを起こすことで、組織としての活動を維持・推進しています。そして、組織はそれぞれが存在する目的を持ち、その目的を達成するために、そこに属する人々が何らかの機能を持ち、日々の行動を積み重ねています。多くの場面でこの組織の目的は、ミッションや存在目的と呼ばれていますが、ミッションや存在目的を達成した時の姿はビジョンと呼んでいます。ビジョンは、存在目的を達成した時の姿を光景として具体的に描き、一人一人がどのようなことを起こすために動けば良いのかを解像度高く示すことで、ミッション達成を助ける存在となっています。このミッションやビジョンはどの組織にも存在しているものですが、明文化されておらず、非常に見えにくくなっている場合があります。また、明文化されていても過渡期においては、ミッションやビジョンの見直しが必要となる場合もあります。

こうした状態では、優先順位をどこに置き、人材を含む資源をどのように配置することが最適なのかが不明瞭になると共に、組織内の人材が活動する時の判断基準が不明確

になり、様々な不具合が起こり易くなります。

特定部門の人材に過度な負担がかかる、仕事量に対して人員が足りない、現場レベルで意思決定ができず物事が前に進まない、という不具合は、複合的な要因によって引き起こされますので、ミッションやビジョンが明確に認知されていないことだけが直接の原因とは言い切れない部分があります。しかし、ミッションやビジョンが明確に認知されていない組織や、過渡期にある組織が、組織としての不調を抱えた時（あるいは不調のサインが出た時）は、対処療法的な施策だけで乗り切ろうとするのではなく、根幹であるミッション・ビジョンに立ち返り、根本的なところから組織を見つめ直すことが、再び健全に前に進むための助けになります。

ビジョンの実現に向けて

今回の京都市芸術文化協会のミッションのアップデートと、新たなビジョン策定の動きは、先が読めない社会環境の中で、組織が転換期を迎えることを見越して、先手を打つ動きだったと私は捉えています。そこで、今回のビジョン策定にあたって注視したことは、最前線で動いているスタッフのみなさんが見ている世界であり、感じていることでした。それは、この過渡期をまさに肌で感じている彼らが、今に見ている世界と、その先に思い描いていることが、新たなビジョンの策定にとって重要なものになると考えたからです。同時に、現場を知っているからこそ、京都市芸術文化協会に関わる人々の願いをミッション・ビジョンに持ち込んでくれるとの期待も込めていました。

こうして、京都市芸術文化協会（京都芸術センター含む）の多くのスタッフが参加した対話の場において、

①それぞれが現場で何をして、どのようなことを感じているか

②自分たちの組織が目指すこと

③目指す世界を実現した時に、具体的にどのようなことが起こっているか

について語り合い、そこで出た声を丁寧に拾い、プロジェクト委員会でまとめたものが、今回策定される新たなビジョンです。

ミッション・ビジョンは策定して終了ではありません。ここからは、ここで描いたことを如何に実現していくかが問われます。

重要なのは、まずやってみるということです。どれだけ素晴らしい文言が並んだミッション・ビジョンでもそこに向かってアクションを起こさなければ絵に描いた餅になります。一見、当たり前の話ですが、新たなミッションに向かうということは、未知の世界に向かっていくようなもので、歩みを進めるには勇気と覚悟が求められます。この勇気と覚悟を持ってまずやってみることしか、新たな道を切り開くことはできません。そして、歩みを進めることが、まだ見たことがない世界を進んでいく知恵とスキルを育みます。

もう一つ重要なことは、ミッション・ビジョンを自分ごととして捉え、達成するためのアクションに関わる人材です。現場で動く役割の人もいれば、組織全体を俯瞰する役割の人も必要でしょう。また、裏で支える人も重要です。新たなミッション・ビジョンを実現していくには、自分ごととして関わる多くの人材の存在が不可欠です。そして、自分ごととして関わる人材が、存分に力を発揮できるよう、彼らが自分で判断し、行動できる環境整備もミッションの達成にとって重要な要素となるでしょう。

世の中が激変する中で、京都市芸術文化協会だけでなく多くの人や組織が変化を求められています。誰もが先が見えない社会の中で、今回のミッション・ビジョン策定の動きをきっかけに、芸術文化に関わる多くの人と共に、描いたミッション・ビジョンを超えた思いもよらない世界を実現できることを願っています。

※協会の中期ビジョンは、二〇二二年秋以降に、本誌および芸文協ウェブサイト等で発表予定。

NPO法人
場とつながりラボ home's vi
組織論、コミュニケーション等の研究・開発・実践から得たノウハウやテクニック、それらを提供する多彩な人材の集まり。対話や体験をベースとした研修、ワークショップによる組織づくりや、イノベーションを育む力のサポート等、「場づくり」による社会変革の無限の可能性を信じて、個々人が個性を活かし合うことができる社会の土壌を創っていく場づくりの専門集団。

京都芸術センター開設二〇周年記念事業「We Age」

パフォーマンス部門出演・日下部一如（くさかべいちにょ）先生（日下部流家元）に聞く

六五歳以上のアーティストによるパフォーマンスと展示

〈We Age〉は京都芸術センターが二〇周年を迎えるにあたり、時間の積み重ねに思いを馳せ「誰もが歳をとる」という当たり前のことに改めて向き合うべく、設定した年間テーマです。このテーマに呼応する形で、六五歳以上の方を対象に、ロック・映像・ファッション・パフォーマンスのジャンルでプランを募集し、二〇二〇年四月、開設二〇周年の記念事業として公演と展示のプログラム「We Age」の実施を予定していました。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、京都芸術センターでも三月から催しの中止・延期が相次ぎ、緊急事態宣言を受けて一時的に休館するなど先の見えない不安に包まれた状態で、記念日となる四月を迎えました。二〇周年を祝う記念式典も中止せざるを得ない状況でしたが、記念事業のひとつであった「We Age」は何とか開催できるようにと、藁をもすがる気持ちで延期を決断。その後も、社会情勢は厳しくなるばかり。六〇歳以上の罹患率が高いという研究結果が明らかになる一方で、治療方法は見つからないまま世界的なパンデミックとなり、さらに先行き不透明な日々が続きました。そして六月、プログラムディレクターとアートコーディネーター皆で話し合い、出演者・出展者全員が六五歳以上であることを意識しつつも、リスクを恐れるだけでなく、いかに安全に実施できるのかを考えようと前向きにとらえ直し、この状況下でできる形での実施へ向け舵を切ります。

その後はパフォーマンス出演の六組、展覧会出展者の八組の計十四組のアーティストとの打合せから始まり、一気に実施まで駆け抜けていきました。

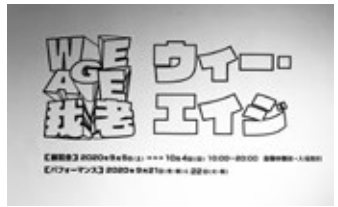
パフォーマンスにおいてはこれまでの上演方法を踏襲するわけにもいかず、それでもパフォーマーと鑑賞者が互いの存在を感じあえる方法はないかと編み出したアイデアが「my ウィンド」プラン。出演者と観客が同じ会場に集まり接触せずとも、京都芸術センターという場で時間を共有するからこそ味わえる鑑賞体験の創出を目指した独自のアイデアでした。パフォーマンス会場は二階の講堂、客席はその真下に位置する一階のフリースペースというように会場をふたつに分け、お客様にはパフォーマンス会場に用意された光りながら回る扇風機と連動したスイッチを、各々手に持っていただきます。会場に用意した巨大スクリーンで観客がパフォーマンスを観ながら、そのスイッチを好きなタイミングで押すことで、パフォーマーをぐるりと囲む形で配置した扇風機が光り回り出します。スイッチを押すことで出演者へ「応援の気持ち」や「鑑賞中の気持ちの変化」を送ることができ、出演者は観客の存在を感じることができる仕組みです。観客、出演者ともにお互いの存在を信じる姿勢が少なからず求められた「We Age」、「六五歳以上とは思えない迫力に驚いた」「楽しかった」という言葉をたくさんいただき、無事に終了することができました。

今回はHANAバンドを結成し、「はなとブルースの輪」と題してパフォーマンス部門にご出演された華道家の日下部一如先生にお話を伺いました。芸文協の会員でもある日下部先生は、自ら「We Age」パフォーマンスにプランを応募してくださいました。

—どうして「We Age」に応募しようと思ったのですか。

京都芸術センターへ立ち寄った際に「We Age」のプラ

（パフォーマンス）かつらかん＆We Edge『We Age？We Edge！』



（パフォーマンス）マヤコフ・エイジ「即興の総合美術」

（展示）ギャラリー北の様子

（パフォーマンス）かつらかん＆We Edge

ン募集チラシを手にしたことがきっかけです。六〇代のパワーを京都芸術センターでどのように発揮することができるのかワクワクし、すぐに日下部流のメンバーに話を持ちかけると、みんな「出演したい！」と意欲的でした。もともと私がロック音楽を聴くことが好きだったことや、日下部流の中にはロックバンドが既に編成されていたこともあり、四つのジャンルからは迷わず「ロック」を選びました。

―舞台本番では真剣に生け込まれている姿が印象的でしたが、実際にロックバンドをバックに花を生けてみていかがでしたか。

いつもは無音の環境で自身の感覚にしたがって生け込みを行っていますが、「We Age」ではロックバンドの音楽をつい聴いてしまいました。特に三曲目で演奏したサム・クックの「Bring it on home to me」では興奮しました。

バンドのメンバーは、いつもはライブハウスなどの狭い空間で演奏することが多いですが、京都芸術センターの講堂という広い空間でパフォーマンスをすることができ、自分たちがプロのバンドになったかのような気分になったと口々に話していました。空間だけでなく、照明もかっこよく考えられていて、本当に楽しく、ありがたかったです。

―ロックバンドといけばなのコラボレーションに挑戦してみて、他に気づきや変化はありましたか。

いつもは伝統を意識して花を生けていますが、ロックと掛け合わせることで新たな視点を持つことができたと思います。いけばなと邦楽のコラボレーションは前例がありますが、ロックとコラボした話は、私は聞いたことがありません。あえてロックを選んだ理由は、個人的にロック音楽の愛好家であるからにほかありませんが、これを機に日本的なものではなく欧米的なものと組み合わせることにも興味が湧きました。生け込むとき、和楽器の演奏が流れていても気になりませんが、「We Age」で試みたロックをバックにした生け込みではいけばなをしているのに、音楽が気になってしまいました。こんな体験は初めてです。いつもの型を乱されたという感覚に近いけれど、心地よさもある、不思議な感覚でした。さらに、普段の私であれば「ここに菊を入れよう」と思うはずなのに、「違う場所のほうが良いかもしれない」という考えが浮かんできたり、いつもは必ず菊を使うのですが「バラの方が良いのではないか」という感覚が強く残ったことも衝撃的でした。

（パフォーマンス）
HANAバンド
「はなとブルースの輪」

―「We Age」を経て今後の活動に変化はありそうですか。

この感覚や変化には希望を感じていて、「We Age」をきっかけに今後もロックをバックに花を生ける機会をつくろうと、本格的に考えています。

時間の積み重ねに思いを馳せるはずだった「We Age」は、参加者の前進するエネルギーの影響を受け、図らずも未来を意識させる時間になったことが印象的です。

八木 志菜（京都芸術センターアートコーディネーター）

京都芸術センター開設二〇周年記念事業「We Age」

展示

二〇二〇年九月五日―十月四日
京都芸術センター ギャラリー北・南、ほか
出品：
五山 智博×うきは白壁レディース
倉本 直治
坂井 存
笹埜 能史
寺田 豊×伴野 久美子
ナミキ・キヨタカ
マヤコフ・エイジ
森 芳仁

パフォーマンス

二〇二〇年九月二二日
京都芸術センター
フリースペース・講堂
出演：
今西 惠利子・フラメンコスタジオ
島田 道雪×QUICK
かつらかん＆We Edge
HANAバンド
寺田 豊×伴野 久美子×
Kyoto Dance Exchange
マヤコフ・エイジ

京都芸術センターが開設二〇周年を迎えるにあたり、時間の積み重ねに思いを馳せ、「誰もが歳をとる」という当たり前のことに改めて向き合うべく六五歳以上を対象とした公募プロジェクトとして、先駆的かつ実験的な十三組の企画を選出しました。シニア世代のエネルギーを発信し、パフォーマンス公演では舞台と客席を別会場に設え、出演者と観客の空気を双方に伝えるため、客席に置いたボタンを押すと、舞台に設置した扇風機が作動するという新たな鑑賞体験に挑戦する機会となりました。

節目の年にあたって

建畠 哲（芸文協業務執行理事／京都芸術センター館長）

今年は京都市芸術文化協会創立四〇周年という節目の年に当たるが、それに先駆けて同協会（以下、「芸文協」と記す）が運営する京都芸術センターが昨年二〇周年を迎えた。私は後者の館長であると同時に前者の理事の一人でもあるのだが、この二つの組織は一体であるともいえれば、まったく異なった性格を持つともいえるだろう。両者の関係は外部の方には分かりにくいかもしれないが、いささか逆説的にいえば、活動内容がいかにも対照的であるがゆえに、重厚な伝統と先端的なアートが共存する京都ならではの文化的なキャパシティーの幅を相互補完的にカバーしているということになろう。

芸文協は出発当初は京都市文化団体懇話会と称したように、市が音頭をとって発足（一九五九年）した広範な分野の文化団体の緩やかな集合体であったようである。立前上は会員制の民間組織だが、二〇〇〇年には京都芸術センター（以下、「芸セン」）の運営を市から受託するようになり、二〇一一年には公益財団法人化されるというように、市の文化行政の一翼を担う公的な役割を強めてきた。

芸センの活動は幅広い分野を含み、伝統から現代までを対象とするという点では、母体の芸文協のレパートリーを受けているといえなくはないが、現実的な運営においては若い世代のアーティストたちに制作と発表の機会を与えることに機軸を置いており、伝統文化においても、たとえば明倫茶会のように茶人ならざるアーティストによるユニークで実験的な試みをしてもらうなど、ビビッドな現代性を重視している。注目すべきなのは実際の運営に当たるコーディネーターの仕事で、六名ほどの若手のスタッフを三年任期で採用し、専門とは関わりなくいきなり美術、演劇、ダンスなどのイベントの現場に送り込み、企画から実施までを経験してもらう。あるいは制作アトリエの提供や海外からの招聘をも含めたアーティスト・イン・レジデンスに携わってもらう。いわば文化機関で働く人材養成のシステムでもあって、退任後、劇場や美術館に勤めることになるスタッフも少なくない。

さて昨年の二〇周年に年間テーマをどうするか議論していた際、若いコーディネーターたちから上がってきた案は「We Age」というものであった。まだ成人を迎えたばかりの年なのに〝老ける〟はないだろうと最初はいぶかしく思ったのだが、辞書を見れば age には（ワインやチーズなどが）「熟成する」という意味もある。芸センも一人前に育ったというわけだ。それに高齢化社会を迎えて、若者が年寄りたちに頑張れと励ましていると取れなくもない。まあ、誰もがミック・ジャガーになれるというものではないが、ユーモラスな響きもあって、なかなかいいテーマではないか、これで行こうということになった。

中心となるイベントはまさに「We Age」をタイトルにした、六五歳以上の方に応募していただく公演（ロック、映像、ファッション、パフォーマンス）のプログラムである。だが準備を進めているうちに、コロナ禍がしだいに深刻さを増し、到底満足な形では実現できないような状況になってきた。当然ながら高齢者は重症になりやすいという事情にも配慮しなければならない。

結果としては三密を避けるためにパフォーマーと鑑賞者とを切り離し、つまり舞台と客席とを別の場所にし、しかも同時中継による一体感のある盛り上がりを演出する仕掛けを導入することになったのだが、詳しくはロックと共演してくださった生け花の家元、日下部一如先生へのインタビュー（十八ページ）をお読みいただきたい。

二日間にわたるイベントは、そうした工夫で何とか悪条件を克服し成功裏に終えることができた。考えてみれば「We Age」とは芸文協が運営する芸センらしい絶妙なテーマであったのかもしれない。若い世代が高齢者たちの文化活動を誘い掛けること。幅広い市民層に門戸を開くこと。しかも単なる文化教室的な発表会ではなく、新たなアートの局面を切り開く実験性を有していること。正直なところ、私自身、これほどの独創性を持ったアーティストが巷に埋もれていたのかという思わぬ発見もあった。

芸センは室町通蛸薬師下るという、京都の中の京都ともいうべき場所に位置している。独特の様式性をもった元・明倫小学校の建物を転用した施設だが、自負していえば、それは単なる跡地利用という消極的な方法ではなく、むしろ歴史的建造物のリノベーションによる文化施設としての蘇生という、最近、国内外で積極的に推し進められている施策の早い例と見なされるべきかもしれない。

これだけの条件に恵まれてはいるが、残念ながら必ずしも市民の間での認知度は十分であるとは言えまい。ロームシアター京都や京都市京セラ美術館は大規模な改装によって生まれ変わったが、二〇年の実績を踏まえた芸センは、次のステップをどう踏み出せばよいのか。

簡潔にいおう。私はその鍵の一つは場所の魅力、つまり室町というロケーションの特権性を見直すことではないかと思っている。便利の良い都心というだけではなく、京都の文化を支えてきたブルジョア階級の街

という雰囲気がまだなんとか維持されているのだ。明倫小学校の建物が立派なのも、街の大店の寄付があったかららしい。とすれば芸センの主要施設に、たとえば明倫ホールといった愛称をつけることも考えられよう。もう一つは施設の空間全体が一つのメディアとなって発信するようなフェスティバルを（できうれば定期的に）開催することである。それにオンライン配信の効果が組み合わされば、かなりの求心力を発揮できるのではなかろうか。

言うは易しで、未だコロナ禍は収まらず、こうしたことの実現には多々、難題が控えていそうである。ともあれ、成人に達した芸センがどのように成熟していくか、これからも温かい目で見守っていただきたい。

京都文化への視座
京都文化の過去・現在・未来を考える

［ミニレクチャー］
村井康彦
（芸文協 顧問・元理事長／歴史家）

［トークセッション］
茂山あきら
（芸文協 理事／大蔵流狂言方）
松尾 恵
（芸文協 理事／ヴォイスギャラリー主宰）＊オンライン参加

進行
中谷 香
（芸文協 専務理事）

収録：二〇二〇年七月（京都芸術センター）
主催：公益財団法人京都市芸術文化協会

※第三回となるリレートークは、新型コロナウイルス感染症拡大防止を鑑み、無観客収録およびウェブ上での掲載記事、動画配信（予定）というスタイルとなりました。

今回のリレートークの前半では、京都の芸術や文化が成立し、日本中に伝播していった歴史的条件について語られている。平安時代の役人たちが自らの仕事を基に同業者の座を作り、それが禅宗文化などと融合し次第に町の文化へと馴染んでいった。具体的な生活から生まれた芸術が、今なお確かに京都には根付いているが、その要因としての「大和心（やまとごころ）」に話は及ぶ。これは通常「日本的美意識」といった抽象的な何事かに結びつけられがちだが、この語が初めて登場した『源氏物語』ではむしろ現実的な処世術を表していた。そしてまさにこの現実への視座こそが、日本文化を基礎づけ、豊かにしているものであるとされる。

後半のトークセッションでは、大岡信の評論『うたげと孤心（こしん）』が取り上げられ、芸術をめぐる「個」と「共同性」が問題にされる。一見対立するとも思えるこれらの観念は、しかし芸術を可能にする二つの要因であり、どちらかが欠けても立ち行かなくなってしまう。芸術文化協会がまさに考えるべき問題が極めてクリアな形で提示されている。

コロナ禍やそれにともなう財政のひっ迫など、芸術の創作環境をめぐって様々な「現実」的諸問題が生じている現

代、これをどう考えるか。歴史的な視座から出発して、未来を見据えるための鍵となる思考が凝縮された、極めて濃密な会となった。

採録・構成 渡辺健一郎

［ミニレクチャー］村井康彦

京都市の芸術文化協会が来年四〇周年を迎えますが、改めて協会として過去を振り返り、現在を直視し、そして未来に向けてどう進んでいくかを考え、それに取り組んでいくことが必要だろうと思います。

歴史を勉強した者として、歴史的な観点から、京都の文化や芸術をどういう風にとらえるか、どういう風に芸文協のこれからに生かせるかということが私に課せられた問題です。しかし「歴史に学ぶ」と申しますが、なかなかそう簡単なことではございません。今日は限られた時間ですが、関わりがあると思われる二つのテーマについてお話してみたいと思います。

文化が発祥・発展する場としての「町」――諸司厨町

その一つが、平安京にあった諸司厨町についてです。大内裏の中にはたくさん役所がありましたが、朱雀大路をずっと北に上がって突き当たったところが大内裏で、その中に、内裏＝居所（図1）を中心にして、その周辺に役所がたくさん集まっていた。古代国家の統治の中枢機関がここに集中しておりました。

そこに勤める官人たちは、貴族を含めて数千の人間がいたと考えられています。その中でも下級官人（1）たちが、仕事がない非番のときに、京中に下がって休む場所が諸司厨町でした。厨というのは台所、そこで食事をしたり寝起きをしたりする場所で、それが役所ごとに京中に設けられていたんです。

そこでこれを諸司（役所）の厨町といい、また「官衙町」とも称しています。平安京が作られたごく初期の段階では、こういう役所町がたくさんありました。この諸司厨町は、やがて平安貴族が盛んな時代になると、これらは貴族の邸宅などに取り込まれて崩れていくんですが、その過程で官衙町に住んでいた人達は、自分たちが勤めていた役所の機能をテコにして、それぞれ職種の集団、いわゆるギルド＝座を作っていきます。奈良では興福寺などにたくさんの座がありましたけれども、官衙町、諸司厨町由来の座が多いというのが、京都の中世における座の特徴です。

その一つに、大舎人座がありました。ところで平安時代は、官人たちの報酬はみんな米や衣類などの現物支給でした。特に行事がある場合にはそれに従うものに衣服を与えたので、衣服作りに当たる織部司の仕事は膨大だったと言えます。その織部司の町が織部町（図2）ですが、この織部町の東側に、大舎人町があります。大舎人というのは、中務省（2）に属していて、衣服の生産には関係ないんですが、隣り合っていたことである時期混交が起こり、そこに住み着いた織り手たちが大舎人座を名乗るようになったと考えられるのです。そして応仁の乱（一四六七～一四七八）のあと、織り手たちが、西軍の陣地＝西陣の跡地に住み着き、大舎人座を名乗るようになった。西陣織の織り手たちのふるさと、発祥の地が実はここであったと言えましょう。

これは織物に関わった人達の座ですが、大内裏の中には色々な種類の役所がありました。

図1

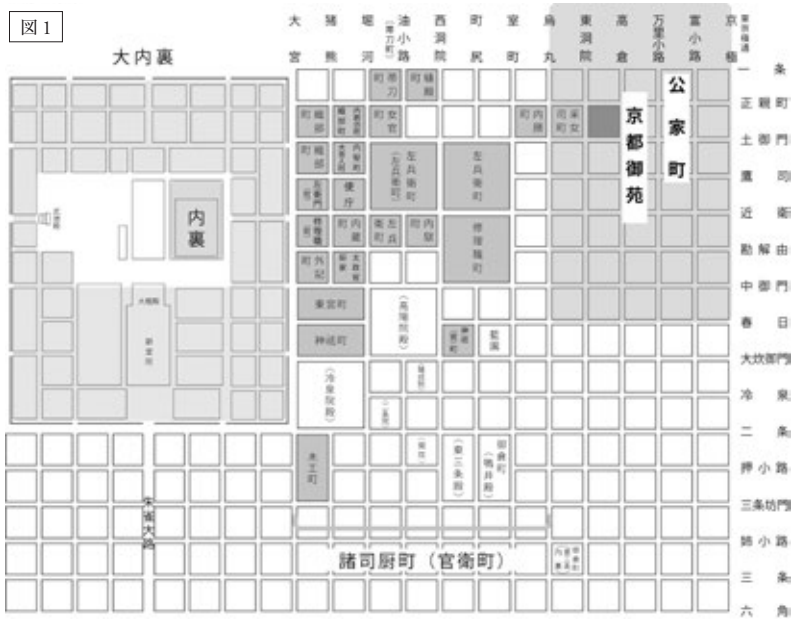


図2

衣食住関係、芸能関係、学芸関係、様々なものについての座が生まれた。座でなくとも、特定の人達が機能を受け継いで自分の仕事としていき、それが中世まで続いていく。京都の場合は王朝文化や芸能に関して、単に「みやび」といった抽象的な美意識が受け継がれているのではない。具体的な形でものを作ったり、演じたりするような形で受け継がれていくということが特徴的であり、大事なことだと思います。京都に伝統工芸が数多く存在する理由のひとつです。

ところで応仁の乱の後、京都の町の範囲は狭くなりますけれども、その中身の密度が高くなる。いわゆる「両側町」(道路を挟んだ両側の人達がひとつの町を作る)がそれですね。これは長い生活を通じて作られた生活の町ですが、それは行政にも認められることで、正式な町として発展していく。その典型が山鉾町です。生活を通してできた町の人達の共同体に支えられて、祇園祭も行われている。京都という町は、この時代、衰えたとは言え天皇、公家がおり、また建武の中興以来、たくさんの地方武士が上洛して京都に住むようになります。そういう武士たちが、在京大名、在京武士として、京都にたくさん、公家以上に住むようになった。

また、五山の禅宗の果たした役割は大きい。禅宗ほど生活文化に関わった宗派はないと思います。朝起きてから夜寝るまで、一挙手一投足が修行であるとして、ものを食べる、花を活ける、香をたく、お茶をそなえる、全て大事な修行だとされて、これが生活文化のベースとなっていく。禅と生活文化は一見かけ離れているように見えますけれども、実は密接にかかわっていた。

そして何と言っても、この時期になって成長してくる町衆が文化の新しい担い手になってきます。その他、あちこち旅わたらいをする連歌師や琵琶法師といった、地方の情報を伝えてくれる人達も、京都には沢山いました。これだけ多様な人間構成の都市というのは珍しい。町衆が成長してきたというこの時期に最も多様な都市民の構成が見られたと言えると思います。京都のそういう多様な都市民構成が、複合文化芸術を生み育て、伝えていく上で重要な意味を持っていたと考えます。

現実主義と生活／芸術――漢才(かんざい)と大和心(やまとごころ)

「漢才(3)と大和心」という二番目の話題に移りたいと思います。この言葉は、紫式部『源氏物語』の「少女(おとめ)」の巻に出てまいります。光源氏の息子・夕霧が元服して、いよいよこれから貴族社会の仲間入りをするというとき、縁者たちも夕霧がどんどん成長して活躍することを期待していましたが、光源氏はそれを抑えて大学へ行かせます。貴族の息子たちが、親の威光で若くしてどんどん立身出世し、皆からちやほやされても、親が死んだり状況が変わったりすると、やがて人々から見向きもされなくなってしまうというのが理由でした。政治的な才能――それを大和心と称しているのですが――は、漢才の支えがあって初めて生きてくるそのために、勉強をさせるという話です。

藤原時平(4)があるとき派手な衣装を着て参内し、醍醐天皇から厳しく叱責された。周りの人はびっくり仰天して、それからは派手な衣装を謹むようになった。実はこれは、時平が天皇と示し合わせて、わざと仕組んだ芝居であったというのです。時平という人は、そういう大和心のある人だったという話です。大和心というのは、日常生活において、様々なことにうまく対処するという処世術、そういう意味合いを持っている言葉であったんですね。日本人はそういう意味で結構、現世主義、現実主義であったと言えるように思います。日本では九世紀末から十世紀初めに、世界に先んじて「私日記」が登場してきますが、そこで本音が語られているというのも、現実主義と無関係ではないという風に思います。そして、日本人のそういう現世主義がベースになって、やがて中世になって生まれてくるのが、生活芸術、生活文化と言うべきものではなかったでしょうか。お茶を飲む、ご飯を食べるというのは日常生活そのものです。それをある種非日常化して、一つの形式にする、型を作っていく、そしてそれを楽しむという、ある意味では文化の一番贅沢な姿ではないかと思います。そういう生活文化芸術が、中世になって形あるものになっていく訳ですが、そのベースは既に平安時代に生み出されていた。それが紫式部によって初めて取り上げられたと言って良い。そういう日本人の在り方、いわゆる日本的な文化が育ったのが王朝時代だと思いますけれども、それが京都を場として育ち、やがて京都という枠を越えて日本特有の文化になっていくんだと思います。これは京都が、物が集まり人が集まり、また散っていく、そういう都であったからこそだと思います。

二つの話題についてお話してみました。後のお話の材料になるか分からないと思いながらしゃべりましたけれども、後は宜しくお願いいたします。

［トークセッション］寄合（よりあい）と孤心（こしん）と芸術

中谷

まずは感想を茂山あきら理事と松尾恵理事にお願いしたいと思います。

茂山

いわゆる貴族文化という非常に高揚したものが、町衆に降りて行って、禅宗の文化と上手く融合し、咀嚼されて、京都文化になっていった。そしてそれが大和心に移っていく。そういう我々のルーツの在り方が非常によく分かった気がします。

松尾

多様な都市構成が王朝文化を伝えていく要件であったということを、非常に興味深くうかがいました。京都は年齢や経験、あるいは国籍や民族によって全然見え方が違っていて、いつも何かしら違ったものを提示してくれるところに魅力を感じます。観光都市のイメージがあるかと思えば、全くそれとは違う受け止め方ができるという多様さは、現在でも同じであろうかと感じました。

左から中谷香、村井康彦、茂山あきら

村井

先年亡くなりました、同級生の杉本秀太郎さんは鉾町のど真ん中に住んでいました。戦後、祇園祭を町衆の文化であると高く持ち上げる動きがあったときに、彼が私に「そう気楽に町衆の文化と言うな！」と言ったことがある。町共同体の文化ですから、やっぱりしんどいことがたくさんある。そういうものに耐えて祇園祭があるのを、よそ者が騒ぐなと。私は鴨川の東、昔は下田舎の北白川村にずっと住んでいますから、京都の一番大事なことは分かっていないという自覚があり、それを失わない様にしているつもりです。

中谷

次に、芸文協はこれから京都の芸術文化の中でどういう役割を果たしていったら良いのか、先生のご意見をいただけたらと思います。

村井

ずっと花のことを調べていて、ある時期はっと気づいたことがありました。茶寄合っていう言葉があるのに、どうして花寄合という言葉はなかったのかと。茶の世界では茶勝負なんかでみんなが寄り集まって、時には賭けをしたりする。やがて整備されて茶の湯になっていくんですが、同じ時期盛んであった花の世界では、七夕になると、前日に花瓶と花材を持ち寄って、花を立てて、座敷に並べる。そして七夕当日になりますと、法要の後、集まった人達が連歌や和歌の会をやったりしていましたが、そこでこれを花座敷とか、花座席と呼んでいました。花で飾った寄合の場なのですが、花寄合とは言わなかった。思うに花を「立てる」というのは、ある種の芸術的な意志があっての行為ですが、それは一人で行うものでしょう。かりにグループで生ける場合でも、最終的には一つの意思で生ける。茶寄合は、複数の人間がいなければ成り立たない、もともと寄合の芸能でしたが、花は個人で行われるものだった。それが花寄合という言葉を生まなかった理由だろうと思います。

寄合の文芸、座の文芸、という風な寄合性が、中世の文化の特徴であると言われ、私などもそれを重視し強調もして来ましたが、大岡信さんが『うたげと孤心』(5)という本で、簡単にいえば、芸能は皆でワイワイやるけれども、その中で孤心を持つのでなければ、本当の芸術にはならないんだ、と言っておられる。やたらと寄合性だけを強調する考え方に、大変厳しい見方をしておられました。これを読んだ時、正直ショックを受けました。

実はこの五～六年、藤原定家の『明月記』(6)を読んでい

ます。私日記ですから、なにがしかの「わたくし」は出てくるものですけれども、これほど自己中心的な日記は、ちょっと珍しい。新古今の時代に和歌の歴史は頂点に達していたと思うんですが、それは本歌取りといった作為の勝ったもので、歌の世界で「わたくし」が徹底された結果です。定家は、他の人は「歌よみ」で、自分は「歌つくり」であると言って、非常に作為的に歌を作り上げていったために、定家の歌はよく分からんと言われていた。しかしやっぱりそういう個＝わがままに徹するということが、芸術を生み出す一つの重要な要素なのかもしれません。

松尾

寄り合うにも、己をちゃんと知っていないと本気で寄り合えないなという想いはいつもあります。意志を持って寄り合うということを、このコロナ危機によって、改めてまざまざと感じています。根本のところでは己、個、わがままですね。これがやりたい、これを目指すっていうところを、しっかり持ったうえでの「寄合」。

村井

芸文協という、文字通り寄り合うための機関ができたことには、バラバラで存在していた人達を結びつけるという大変大きな意味がありました。次に、指定管理者制度で京都芸術センターという場ができて、芸文協が今度は人と場をも結びつけられるようになった。今大事なことは、芸文協と芸術センターとが、お互いどういう風に機能しあうのか、もう一度話し合うことではないでしょうか。お互いに共通する年間のスケジュールを持ち、それぞれの仕事が互いに共有されるような形が必要なのではないか。でないと、一緒に同じ場所に生活しながら、一緒ではないという感じになっているんじゃないかということを、一番痛感していました。

茂山

寄り集まりでも、寄合までいっていなんですよね、まだ。ある瞬間にだけ一瞬磁石のようにぴっとくっついても、それ以外のときは離れちゃっている。それは恐らく、多分芸文協の方の内部が未整理だからなんです。組織的にしっかりしようと思うならば、内部をもう少し整理していって、関係性をちゃんとわかっていかないと。どうも皆さん、お山の大将に近いんで、「俺は、俺は」と個が出すぎているところがある。そこがもう少しひとかたまりになれば良い。

村井

芸術家っていうのは、大体わがままなので、それをまとめていくっていうのは、それ自体が大変難しいことです。しかし何か共通項を見出してやっていかれることを是非お願いしたい、期待したいという風に思っています。

中谷

様々なジャンルの芸術家の集まりである芸文協にとって、京都というまちの風土・歴史をふまえた上で、どんな組織づくりをしていくのか、中期ビジョン策定に向けた、たくさんのヒントをいただきました。「漢才」と「大和心」、「孤心」と「寄合」。これらのキーワードをもとに、引き続き協会のこれからのかたちを検討していきます。

有難うございました。

註釈

(1)官人の中でも、役所の実際の仕事を受け持っていた人たち。位で、五位以上が貴族、六位以下が下級官人とされる。

(2)律令制の八省の中で最も重要とされていた省庁。天皇の国事行為に関わることなど、朝廷における政務の一切を担っていた。

(3)中国由来の学問、あるいはそれに精通していること。一般的には日本固有の精神としての「大和心」と対置されるが、ここではその捉え直しが行われている。

(4)平安時代前期の公家。醍醐天皇の治世に左大臣にまで上りつめた。菅原道真を陰謀により左遷させたという悪役のイメージでよく知られている。

(5)一九七三年から六回に渡り、『すばる』で連載された。

(6)鎌倉時代の公家、藤原定家による長大かつ克明な日記(一一八〇～一二三五)。定家は『新古今和歌集』の編者の一人であるが、当時としては極めて斬新な手法を用いて歌を「つくって」いた。

「分断の時代に、それでもなお」

渡辺健一郎（俳優／演劇教育研究・実践家）

現在開催されているリレートーク「藝・文・京」では、社会の中で芸術に、芸文協に何ができるのか、ということの模索を様々な視点から行っています。私たち（本冊子を手に取った人たちの多く）は芸術や文化を何か重要なものだと考えているでしょう。ただ、その価値は捉えどころのないものだということも共有されていると思います。キックオフイベントで近藤誠一氏と茂山あきら氏も、「合理的に『0』か『1』に振り分けること」のできない価値に接近するための芸術について語っていました。芸術は、まさに捉えどころがないがゆえに重要であるということでしょう。しかしこのような考え方を受け容れてもらえないことも少なくありません。例えば捉えどころのないものに税金を使うなんてどういう了見だ、といった声は日増しに大きくなってきているように思います。だからといって、芸術や文化の「有用性」を語るというのも何か違和感が残る。「芸術は社会に役立ちます」といった言葉や考え方ではアプローチできない何事かに、芸術は視線を向けているように思えます。リレートークで行われた様々な議論は、この問題についての手がかりとなっていたように思います。

リレートークⅡで加藤博史氏が「あることそのものの価値」について論じていました。人間存在は、何か理由や原因があるのでもなく、何故だか分からないが〈ただ、ある〉。そしてまさにそのことを肯定し愛さなければならないのだと。社会学者の大澤真幸氏も、養子への「真実告知」に関して同じことを言っています。養子に選んだ理由を当の子どもに伝える際、例えば「賢そうだったから」などといった条件付きで説明してしまうと、子どもには深い傷が残ってしまう。個人の「選択」について説明しようとするなら、そこにはどうしても何か理由が必要になります。しかし、何か深い愛が可能であるとすればそれは、選択以前のところに、すなわち理由のない「偶然」の領域に見出さなければなりません。

われわれはどうしても、何事にも説明を求めてしまいがちです。「エビデンス（証拠）」という言葉が流行しているのもそれと無関係ではないでしょう。しかし他人を愛することに証拠や原因を探し求めたところで意味はありません。証拠に基づいてしっかりと議論を交わし、正しい方向を目指して歩みを進めて行くということも間違いなく重要です。しかしながら、人間について、自分について、他者について考えるならば、この「正しい」とはどういうことかということに最初に考えを巡らせなければならないでしょう。

まさに現在、正しさをめぐって分断が生じています。目の前の生命を守ること、移動の自由や会話の自由を担保すること、経済活動を推進して共同体の生活基盤を固めること―様々な「正しさ」の分断に、エビデンスだけでは対処できません。それでは、一体何ができるというのでしょうか。われわれに、あるいは芸術に。

リレートークⅡのキーワードのひとつであった〈隔離〉の問題について考えてみましょう。ボケや死といった、理性ではコントロールできない事柄を社会の外側に隔離し、内側の秩序を保とうという考え方は、まさに合理的な世界の正しさに基づいています。社会なるものは、特定の正しさを軸にしてどうにかバランスを保とうと（あたかもバランスが保たれているかのように見せようと）皆が互いに演技して成立している、一つの上演だと言えるかもしれません。その意味で社会とは、社会的な正しさとは、偶然に成立しているだけの一つの大きなフィクションです。しかしそれは当然一部の誰かにとっては生きづらいものであるでしょう。厄介なことに多くの場合、少数派の声は黙殺されてしまっています。つまり、「みんな同じ条件（フィクション）の中で生きているのだから、お前もそれに順応しろ」と言われてしまい、声が届かないのです。

現実の諸問題を「フィクション」と置き換えることに不満を覚える方もいるかもしれません。ただここで言いたいのは、各々が直面している厳しい「現実」が大したことではない、ということでは決してありません。社会や自分の生活が今のようであるのが偶然に成立したフィクションでしかないとすれば、別の社会、別の生活を構想することもやはり可能なのではないかということなのです。そしてその構想の端緒に、あるいは中心に、芸術を位置づけられるのではないかということなのです。

人と人とは分断されているというより、「つながり」はそもそも偶然に成立しているにすぎない。たまたま近所に住んでいるとか、同じ国に生まれたとか、親子関係ですら自分で選択した訳では当然ありません。絆や連帯、共同体のようなものが成立しているとしても、それは互いに分かり合っている「から」ではない。たまたま出会い、なんとなく

つながり、それをきっかけにだんだんと分かり合っていくにすぎません。自分の抱えている「正しさ」も、その中で偶然に醸成されたものだと言えるでしょう。そしてまた、自分とは違う正しさを持っている人、自分とは異なる世界を見ている人とも、ただ、共に、ある。偶然に。まずはこのことに思いを馳せなければならないのではないでしょうか。

このようなことを、日常生活のただなかでじっくり考えることは極めて難しいと思います。どうしたって目の前に「現実」はある。〈偶然〉なんて、「現実」に照らせば不要不急の最たるものです。それは〈要〉や〈急〉といった観念に疑義を呈するものなのですから。今ある現実の中で、生活のために働かなければならない、疲れたら休まなくてはならない、時間もお金も満足にはない、しかし被介護者を見棄てる訳にはいかない云々…と、急務で必要なことに駆り立てられると、偶然に思いを馳せる余裕などなくなってしまう。コントロールのできないものは隔離するという発想になるのが、ある意味では〈必然〉です。考え方の違う他人の意見は黙殺して、自分の考えるコントロールの在り方を推進するというのが〈必然〉です。

しかし例えば介護に関して言うならば、社会の外に追いやる隔離か、身を粉にして寄り添う献身か、といった二者択一のように考えられてしまっていることからまず見直さなければならないでしょう。菅原直樹氏は「老いやボケを社会で受け入れる」という発想や、介護活動自体を楽しく尊いものと捉える見方を提起していました。現実に照らせば難もあると思われる、このような別の世界への通路を開きうるのが芸術なのかもしれません。「ただある」ことへの愛を担保するために重要な第一歩はおそらく、不要不急なものを現実に滑り込ませることです。芸術が〈必要〉であるのは、まさにここにおいてなのです。

私は二年ほど前に東京から関西圏に引っ越してきました。それからすぐに、京都の豊かな時間の流れに感銘を受けました。急を要する「現実」とは異なるリズムを保持した芸術実践の場が多数存在していると感じられました。しかしそれは、現実から切り離された幻想の世界であるというのではなく、確かに現実と地続きであるように感じられました。

リレートークⅢで村井康彦氏が、中世の京都の文化は、生活の必要から出発して生活芸術を生み出すことで発展していったと語っていました。生活芸術は、目の前の現実のリズムを変えるためにあったと言えます。実用性を考えれば無駄とも言える食器や建築の装飾、あるいは美術品などは、実用、要、急、現実を捉え直す契機となっていたのです。それは、今ある生活を豊かにするだけではない。生活なるものについての考え方を変えうる力を持っていると言えるはずです。そして「現実」に黙殺されても仕方のないその力への視座が、京都では今なお随所に感じられるのです。文化が根付くというのはこういうことなのだと、今まさに身をもって体感しているところです。

しかし『世界文化自由都市宣言』のもと文化政策に力を入れてきた京都市であっても、観光客の減少に伴う財政難の中で、芸術や文化にどれだけお金を出せるかどうかは今後かなり議論がなされることでしょう。芸術をただ創作すること、ただ鑑賞することそれ自体に尊さがあると感じている人もいますが、そうでない人も決して少なくないのが実情です。芸術なんかではなく「現実」に予算をまわせ、という声が大きくなるのも時間の問題でしょう。そうなるともう大分手遅れで、予算はどんどん削られていくことになっていきます。

それを回避したいならば「不要不急の必要性」を共に考え、提案していくといった態度もとっていかなければなりません。自治体に対してだけではなく、分断の向こう側の人に対しても。正しさを共有できない人たちを、隔離したりコントロールしたりしようとするのではなく、少しでも芸術を身近に感じてもらえるように演出プランを考えていかなければならない。「芸術の重要性が分からないなんて！」と断絶を表明するのではなくて、その「分かる」と「分からない」との間をつないでいく道を探す必要があるでしょう。ある種矛盾しているような「芸術の現実」に、それでもなんとか食らいついていける場所やしくみ、求められているのはそういったものなのかもしれません。

渡辺健一郎（俳優／演劇教育研究・実践家）
ロームシアター京都「子どもと舞台芸術」二〇一九・二〇二〇年度リサーチャー
演劇教育の研究と実践を通じて、芸術と社会との結節点を探求。

「京都市芸術文化協会賞・新人賞」

京都市芸術文化協会では、所属する会員を対象に、近年の芸術文化活動が特に顕著な方や、芸術文化の向上に多大の功労があったと認められる方を表彰する「京都市芸術文化協会賞」、また新進で活発な芸術文化活動が認められ、今後の芸術文化活動においてさらにその活躍が期待される方を表彰する「京都市芸術文化協会新人賞」という二つの賞を設けています。二〇二〇年に受賞された三名をご紹介いたします。

【京都市芸術文化協会賞】

世古口 瑛喜（洋舞）

幼少より上島君子バレエ研究所で上島君子氏に師事。在籍中に友松宏之氏、薄井憲二氏らに薫陶を受け、井上バレエ団（東京）へ研修に行くなど研鑽を積んできた。平成十一年にバレエスペースフェアリーを創設し、バレエ芸術の普及・向上、後進の育成に務める一方で、バレエ作品の普及に力を注いでいる。在籍している全京都洋舞協議会では委員長や公演の実行委員として活躍し、人望も厚く、なくてはならない存在である。中でも、平成二二年京都市・グアダラハラ市姉妹都市提携三〇周年、日本・メキシコ交流四百年記念事業「メキシコ公演」では、団長を務め、凱旋公演も成功裡に終えた。

近年では、昨年の「全京都洋舞協議会六〇周年記念公演」の実行委員として舞台を支え、「第七四回文化庁芸術祭賞舞踊部門優秀賞」受賞に大きく貢献した。当協会では、理事等を務めるなど長きにわたり協会の運営に寄与している。

大江 又三郎（伝統芸能）

江戸時代より続く京都の能楽・大江家に生まれる。幼少より父である六代目又三郎の教えを受け、七歳にて初舞台を踏む。父の逝去を受け七代目当主を名乗り、子弟の指導と一門の芸継承に努める。また大江定期能を年四回開催し、現在まで能楽の発展・普及に弛まぬ努力を続けている。

長年、日本の能楽師の中央組織である「能楽協会」の理事として能楽協会京都支部長を務め、ともすると東京を代表とする中央主軸の古典業界において地方の雄、京都の古典文化の普及を図る。

明治四一年建設の「大江能楽堂」（京都を彩る建物や庭園に認定）の継承・維持に努力し、能楽堂を使って地方の修学旅行生に能楽の講座等を開催、一般市民にも数々の能楽の講座を開催し、能楽の普及に努めている。海外公演にも積極的に参加するほか、青少年への能楽普及活動には諸団体とも協力して多方面で精力的に取り組むなど、能楽界の発展に尽力している。

【京都市芸術文化協会 新人賞】

山内 登喜雄（絵画）

「自分の死生観を絵画、立体造形、どんな形であれ可視化することが可能ならば、自分は『死』と向き合うことができるようになり、恐怖心、不安感からわずかながらも逃れることが出来るはずだと、自己暗示することで制作エネルギーにしています」と自身が話しているように、表現の変化に富んだ作品を多く手掛けている。

マチエール（作品の材質がもたらす美術的効果）に特徴があり、作品に独創性が見られる。これまで、日展をはじめ、日春展や青塔社展、京都芸術センターで開催した協会主催の「ＣＲＩＡ展」など多くの展覧会に出品し、日展では平成二三年、二九年に特選を、三〇年には「第五回続日本画新展」で大賞を受賞するなど、受賞歴も多く、今後の活躍が期待される若手の日本画家である。

コロナ禍における建築家

衛藤照夫（株式会社ひと・まち・建築設計　代表取締役／京都府建築士会顧問・日本建築家協会京都会会員）

建築には、設計、施工、行政などの分野があり、私自身は、大学卒業以来建築設計業務に携わっています。また、業務開始とほぼ同時に入会した社団法人建築士会では、会員の属性は、過半を占める設計分野に続き施工、学術、行政分野等があります。また、ここ二〇年ほど所属しているＪＩＡ※は、建築設計に従事する会員が殆どで、建築家資格を標ぼうしています。現在のコロナ禍は建築家にも大きな影響があり、ＪＩＡでは、この災害下で建築家がどのように仕事をし、展望を持つかを問うアンケートを実施しました。この結果は、芸文協の会員アーティストにとって参考となる部分が多く、ここにその概要を私見を交え紹介いたします。建築を創るにあたっては、設計分野と施工分野の働きが必要です。また、分野により違いはあるが、多くの分野で受注の減少や業務遂行上の障害などコロナ禍の影響を少なからず受けています。今回は、設計分野の専門家（建築家）がこの被害をどのように受け止め、また対処していこうとしているかをお伝えします。

昨年末から始まったコロナ禍は、アジア人、日本人の感染者数は欧米と比べ格段に少なく、当初は対岸の火事的なとらえ方でもあったが、ひと・ものの流動化により現在は全世界的な災害として捉えられています。

このような状況下で、感染媒体である人と社会を包含する都市と建築に大きな役割を持つ建築家はコロナ禍について、自身の業務について自己の考えを表明する責務があると思います。即効性のある具体的な取り組みとしては、飛沫感染防止策や、風通しの確保などの対処療法的な改善が進められていますが、感染症は今後も継続するのではとの観点から、人々の暮らしや社会に対する建築の在り方や役割を考え直すことが必要であると思います。これらについては、建築家対象のアンケートを紹介したいと思います。（左記欄外参照）

アンケートではまず、コロナ禍により建築家の仕事ぶりが変わったかを問うています。これに対しては、ほぼ全員が変わったと答えています。また、自身の仕事についてリモートワークを中心とするＩＣＴ（情報通信技術）の活用はという問いについても同様に必要かつ有益であると答えています。

遠方のクライアントや、現場への情報伝達は、距離の障壁がＩＣＴ活用により減じ、ユビキタス（ＩＴによる情報の偏在性確保）社会の形成が進んでいるとの意見が多くあります。現実に建築設計では、建築ＣＡＤや３Ｄソフトの使用を含めデジタル化しているため、対クライアントや行政窓口とのやり取り、設計と現場のコミュニケーションのＩＣＴ移行はスムーズであったのだと思われます。現在は、設計事務所内部のコミュニケーションもＩＣＴ抜きには考えられない現状でもあります。

一方、美的センスを含む人と人との情報交流、人と人、人と風景など自然との交感によるコミュニケーションには、多くの建築家がその必要性を主張し、このような時代だからこそリアルな交流の必要性を訴える回答も多く

アンケート概要

新型コロナ禍について以下の質問が出された。（26人中の回答人数）

1. あなたの建築設計の環境、その考え方、方法を変えたか。
── 変えた（22人）、変えない（2人）、どちらでもない（2人）
2. 変えたと答えた方は、何がどのように変わったか具体的に。
3. 今後の、建築設計（方法、内容など）は変わるか。
── 変わる（22人）、変わらない（1人）、どちらとは言えない（3人）
4. 変わると答えた方、何がどのように変わると思うのか具体的に。

※ＪＩＡ（公益社団法人 日本建築家協会）は昨年5月とその半年後の11月に、会員建築家58名にアンケートを実施し、コロナ禍への対応や考え方を問うた。その結果が今年のＪＩＡの会報誌1月号に掲載されている。

あります。

個人のアトリエ事務所から組織事務所、有名建築家を含むこのアンケート結果は、生回答でなければ伝わり難い部分もありますが、まとめると、今回のコロナ禍においては、新たな感染症の発生も想定しつつ、設計者の働き方を含めた取り組みの常態化の必要性を建築家は感じています。また、働き方改革とデジタル化の進展は社会的課題の解決スピードを早め、これらにより、自由で創造性豊かな場や働き方が求められるとする建築家が多くいます。

結論的には、今を生きる建築家として、まず、ＩＣＴの可能性への共感とともに、「場所の力」や「人が集まること」の意義を再認識し、その上でＡＩでは評価できない美しさや人間らしい価値の再確認の必要性を理解し、高度な設計技術と人間の感性に訴えかける設計力が新たな都市・建築、場の創造であり、建築家のなすべきことと思います。

以上が建築家へのアンケート結果から得られた気づきですが、建築設計は、人の手作業や感覚が直結している多くの芸術分野に比べ、ＣＡＤや３Ｄソフトなど本来的にＩＣＴを活用する機会が多くＩＣＴ移行が比較的容易であると思います。一方、作家の感覚が手作業など肉体を通じて昇華させる芸術の、本質的なＩＣＴ活用の流れが楽しみであり不安なところです。

報活

告動

吟詠オペラ

『智恵子抄そして愛』発行

脚本：廣 青隴　音楽制作：中原昭哉

吟詠オペラ『智恵子抄そして愛』
脚本：廣 青隴
音楽制作：中原昭哉
発行所：京都市詩吟文化連盟
発行：2020年10月
印刷：大阪コピー
〔非売品〕

当協会で長く理事を務めていただいている廣 青隴氏が、このほど、吟詠オペラ『千恵子抄そして愛』を発行されました。これは、廣氏が四〇年あまりをかけて取り組んできた詩吟オペラの新作であり、また、当協会副理事長であった故・中原昭哉氏の作曲による作品全体を通した音楽美を備える、新たな完成形を目指したものです。ここには、廣氏による脚本と、中原氏による楽譜が収録されています。

吟詠オペラは、独吟・合吟・舞や劇表現、箏や尺八の演奏などを混合した廣氏独自の表現「声の文学」であり、これまで『明智光秀の最後』『鶴の恩返し』『楢山の雪』など、そのシナリオの執筆から全体の構成、出演まで、精力的に取り組まれてきました。

この『智恵子抄そして愛』では、高村光太郎著『千恵子抄』（一九四一年）をテーマに、波乱の中に愛を貫く光太郎と千恵子の歩みを、劇的に、またロマンティックに取り上げています。

中原氏はこの作品のために二年半をかけ、現地踏査をしながら舞台背景を考慮して吟詠の分析と作曲を手掛けましたが、楽曲完成の一年後（二〇一五年）、舞台上演の実現をみぬままに逝去されました。完成舞台を見ることなくこの世を去られたことを、心から惜しみ、書籍化されたのがこの『智恵子抄そして愛』です。

廣氏は、序文において〔現代は奇しくも新型コロナウイルスの感染という「病菌との戦い」に入り、音楽や舞劇の発展も消極化を余儀なくされているが、このような時こそ、芸術にあっては既存の反省と、新しき理想への飛躍に、沈思創造の知性や感性を磨くべきではないかと思いながら、私も、このコロナに打ち勝った暁には、公的舞台において、私と中原先生の合作である、この『吟詠オペラ・千恵子抄そして愛』を発表させたいと念じているのである。〕と括っています。

KYOTO ARTBOX

京都文化芸術総合オフィシャルサイト KYOTO ART BOX フルリニューアル!!

KYOTO ART BOXは、京都市が提供する芸術や文化に関するウェブサイトです。

二〇一二年の開設以来、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）が管理と運営を行なっています。

「イベント」のコンテンツでは、アートイベントに関する情報掲載の希望を募り、記事として発信しています。無料で記事掲載ができますので、芸術や文化関係者のみなさまは是非ご利用ください。「作家・施設」のコンテンツでは、京都市を中心に活躍するアーティストや文化団体、ギャラリーや劇場などを紹介しています。さらに、これまで運用してきた「KAB Dialogue」や「KAB Landscape」といったコンテンツでは、インタビュー記事によってアーティストの活動を紹介し、またインターネット上で閲覧できるアート作品を公開することで、サイト訪問者とアートを繋げる多様な取り組みを行ってきました。

一方で、開設から九年が経過し、SNSやブログサービスが発展したことによって、誰もが気軽に情報発信ができるようになるなど、インターネットにおける情報運用の環境も変化してきました。小規模の個人・団体には手が届きにくく、公共のウェブサービスだからこそ取り上げるべきコンテンツを模索した結果が、今回のフルリニューアルに結びつきました。

今春の大改修で「ヒストリー」と「サポート」の新規コンテンツを基軸に据えました。

「ヒストリー」では、京都のアートシーンがどのような変遷を経てきたのか、そしてどのように現在に接続するのかを、様々な視点から専門家や経験者に語っていただきます。第一弾のテーマは「危機を超えて…」。これまでアートシーンが経験した様々な危機を取り上げ、現在のコロナ禍を乗り越えていく力とします。「サポート」では、芸術や文化に関して京都市が行う支援や、国内で提供されている支援の情報を掲載します。また同時に、支援を必要とするアートプロジェクトについても情報を募集し、同じプラットフォームで掲載することで、支援を行う側と必要とする側の両者の情報が自律的にマッチングするように構成しました。

これらのコンテンツ改修に加え、ウェブサイトのデザインも一新。アーティストの息づかいや手仕事のぬくもりを伝えるこれまでのデザインから、リニューアル後は、幅広い分野の芸術や文化が共存できるような、ニュートラルでクールなデザインとしました。新しくなったKYOTO ART BOXを、ぜひご訪問ください。

KYOTO ART BOX～まちを形成する文化の気風

京都には重厚なアートシーンがあり、このウェブサイトでは、多様な分野の取り組みが響き合うポリフォニー（重奏性）を探している。触発し合うことで新しい企画や発想が生まれたら面白いし、図鑑のように様々な取り組みを眺めるのも楽しい。しかしこのウェブサイトの本当の目的は、京都のまちのエートス（精神気風）を醸成することなのではないかと思う。文化的リテラシーの向上だけではなく、表現するという営みがまちに溢れていることを知ってもらいたい。

今日もどこかで、誰かが自分の表現と向き合っていて、その命を生き、形跡を伝えようとしていることが、京都のまちに漂う文化的な気風を、さりげなく作っているのではないだろうか。

箕浦 慧（京都芸術センター アートコーディネーター）

前田珈琲明倫店リニューアルオープン！キッチンがtower!?

「前田珈琲明倫店」は、一九九三年に閉校した明倫小学校の校舎が京都芸術センターとして生まれ変わった時、一階の教室にカフェとして入店しました。鉾町内にあり山鉾をイメージした外観、スペイン風の装飾など京都らしさとモダンさを兼ね備えた築九〇年となる建物（現在の建物は一九三一年竣工）は、文化財的にも価値が高く、現在は演劇や展示など芸術の発表の場にもなっています。

また、明倫店から歩いて三分ほどの場所に前田珈琲室町本店がございます。その「前田珈琲明倫店」の開店二〇周年を記念して、店内のキッチンを「tower（KITCHEN）」という彫刻作品に作りかえよう。というプロジェクトが動き出したのは二〇一九年春頃の事でした。

明倫小学校だった「前田珈琲明倫店」。

そんな地域の人々にとって特別に愛着のある場所で

前田珈琲 明倫店「tower（KITCHEN）」店内の様子

tower（KITCHEN）が「気づかぬ間にそこに出来ていた」作品ではなく、多くの方々と「一緒に完成させた」作品にしたいという思いからクラウドファンティングで資金を募り改装しようという運びとなりました。

そんな中、二〇二〇年の年明け頃から新型コロナウイルスの波紋が広がり始めました。

プロジェクトを始めた当初は、社会がこのような状況になるとは思いもよりませんでした。しかし、新型コロナウイルスの波紋は京都にも如実に広がって飲食産業、アート業界にも影響が大きく、二〇二〇年四月頃には前田珈琲も文化施設内の店舗は一部休業を余儀なくされてしまいました。

多くの方が苦しんでおられる中で、tower（KITCHEN）のような未来志向のプロジェクトへの支援を募りつづけていて良いのか、正直プロジェクトメンバー一同、悩みましたが、ここで私たちまでもが自粛してしまうのは、後ろ向きな選択ではないか。こんなときだからこそ、未来を語る、アートプロジェクトを推進していくべきではないか……そんな気持ちもあり、数々の相反する思いも含めてプロジェクトメンバーで相談し、このクラウドファンディングは、達成に向けて最後まで全うすることを決め、二〇二〇年四月二三日早朝、達成することができました。

夏季に入り、着々と工事を進めて二〇二〇年十月リニューアルオープンを迎えました。

店舗の中に大きなtower（KITCHEN）があり、プロジェクターで動画も流しています。音響をはじめ、店舗全体が現代アートの作品となっており、ご来店され

るお客様の反応も様々で、とても楽しく新しい店舗が出来たと思っています。

京都には、数々の美術館博物館や芸術大学はあっても、アーティストと地元の人が屈託なく交流できる場所は少ないと聞きます。

アーティストと地域の方々。京都に幾多ある学校の学生同士と。両者がこの店で、tower（KITCHEN）を前に、居心地の良さと刺激の両方を感じる。そしてこれをよすがに、ワークショップやイベントの開催など、皆が繋がるような場づくりができたら。それが、長年この地域でお店をやらせていただいている前田珈琲の、これからの役目なのではないかと考えています。

喫茶店と現代アートとのコラボレーション、前田珈琲明倫店へ是非ご来店下さい。

（前田珈琲）

キッチンがtower!?

プロジェクトメンバー：金氏徹平（現代美術家）、家成俊勝（建築家）、金島隆弘（アートプロデューサー・芸術学研究員）、北原和規様（グラフィックデザイナー）

着工期間：七月一日から

リニューアルオープン日：二〇二〇年一〇月二日

《前田珈琲明倫店》

営業時間：一〇時～二〇時

定休日：年末年始（一二月二八日～一月四日）、臨時休業あり、京都芸術センター休館日は休業、全席禁煙（テラスも含む）

電話番号：〇七五－二二二－二二二四

住所：〒六〇四－八一五六 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町五四六－二 京都芸術センター内一階

《アクセス》

阪急京都線「烏丸」駅、地下鉄烏丸線「四条」駅より徒歩五分

URL https://www.maedacoffee.com/

公益財団法人 京都市芸術文化協会 四〇年のあゆみ
～京都市文化行政とともに～

中谷 香（芸文協 専務理事）

京都市芸術文化協会（以下、芸文協）は一九五九（昭和三四）年に京都市文化団体懇話会として発足し、一九八一（昭和五六）年に財団法人として創立しました。

昭和三十四年、芸術活動への意欲に燃えた人達が、高山義三京都市長の呼びかけに、期待をふくらませて集まりました。

元春日小学校に参集した団体は六〇〇を数え、会場は理想と希望に燃えたぎる質疑応答で喧騒な雰囲気だったようです。その中心には京都市文化団体懇話会初代会長の眞下五一氏の存在がありました。

千年の都・京都の歴史に培われた文化の伝統を継承し、さらに新たな文化芸術の創造を推進する使命を背負い、新しい時代の文化をより一層高めるため、分野の枠を越えた交流が始まりました。

この時すでに京都市は国際文化観光都市の実現を目指し、全国の文化行政のトップを走っていました。一九五〇（昭和二五）年には現在も続く「華道京展」「京都薪能」が開催されています。

京都市文化行政の指針・期待に応えるべく活動を展開する芸文協のあゆみを、ここでは変化にあわせて四期に分け、当時の理事長をはじめ役員の方々の言葉をもとに振り返ります。

【第一期】一九八一～一九九九（昭和五六～平成十一）年

新しい文化を創造する都市・京都を目指して

一九八一（昭和五六）年　文化団体懇話会発足から二十年を迎え、より積極的な活動を展開するため法人化を目指し、基本財産となる募金活動がスタートしました。同年九月三〇日 奥田 東（元京都大学総長）会長の元、京都市の協力を得て、財団法人京都市芸術文化協会が創立されました。

京都市が打ち出した世界平和と新しい文化の創造の実現を目指す『世界文化自由都市宣言』（一九七八年・昭和五三）の都市理念の下、一九八三（昭和五八）年に「新しい文化を創造する都市・京都へ」第一期「京都市基本構想」がスタートします。

「日本が誇る京都の文化は、京都に住む私たちの生活の一部でもある。京都に住んでいるから、守り継承して行かなければならないものと言える。」（初代理事長 奥田 東）

一九九〇（平成二）年　バブル経済の中で打ち出された国の政策「ふるさと創生一億円事業」の一環として京都市では、京都の芸術活動

【第二期】二〇〇〇～二〇一〇（平成十二～二二）年

京都芸術センターの運営

「異なる歴史を持つ芸術センターが、ここを拠点に新しく歩み始める。」（元副理事長 中原 昭哉）

一九九六（平成八）年　京都市における文化政策初めての計画である「京都芸術文化振興計画」が策定され、その具体的施策として、〈京都アートセンター設立〉が掲げられました。「二十一世紀は芸術文化が都市を創る時代である。」を基本理念として、二〇〇〇年、京都市における文化・芸術の創造発信拠点として、元明倫小学校の建物を活用した「京都芸術センター」が開設されました。

芸文協は、開館以来京都芸術センターの管理運営を受託し、芸術家の育成、社会との交流の促進、現代から伝統まで様々なジャンルの文化芸術活動事業や作品の制作・発表の支援事業を行ってきました。

「二十一世紀に突入して、世界の変革は危機を迎えるのである。芸術はどの世紀においても、表現を的確に残す大きな仕事であると考える」（元相談役 野村 順一）

歴代の理事長をはじめ会員の皆さまが継承し、語られてきた京都の文化芸術への思い。四〇周年を機に振返る機会を得て、改めて歴史に培われ、そして「人」により受け継がれてきた京都の芸術・文化の重みを感じています。

二〇〇一（平成十三）年　ようやく国において、「文化芸術振興基本法」が制定されます。

の活性化と市民文化の振興を図る「芸術祭典・京」を実施することが決まり、その中心となる実行委員会委員長に当時の理事長である河野健二氏（元京大名誉教授・元市立芸術大学学長）が就任されました。

一流の芸術活動と市民の文化活動の両方を総合的に行う祭典として、芸文協においては推進委員会等を設置し、分野を越えた芸術家の様々な交流事業が展開され、芸術活動部門の中心的役割を果たしました。

「芸術・文化の向上は京都にとってはなくてはならないものですが、同時に市民にとっても不可欠な栄養源です。」（元理事長 河野健二）

しかし、行政が進める文化行政との関係は、決して順風ではなかったようです。

「行政がどこまで芸術を理解し育成を図ろうとしているのか。行政が発案した芸術文化の運営に、行政の思惟と意見、あくまで行政環境の中で慣らされてきた思考と、芸術家との思考に広い違いを感じることも多々あった。だが、京都という都市の歴史と未来を双方が推進させなければならぬ課題がある。」（元理事長 野村 順一）

ここに京都の文化・芸術の発展を願う、当時の熱い思いを感じ取ることができます。

二〇〇六（平成十八）年　「京都文化芸術都市創生条例」が施行された同年、現顧問である村井康彦氏が理事長に就任されています。

二〇〇八（平成二〇）年　「源氏物語千年紀」を迎え、芸文協では中原昭哉副元理事長を委員長とする実行委員会を立ち上げ、「源氏物語と京の雅」をテーマに積極的な異分野交流事業が展開されました。当時ではまだ例の少ない、多分野コラボレーション作品において、芸文協の存在を大いに発揮する時代であったと思います。

【第三期】二〇一一（平成二三）年～二〇二〇（令和二）年

文化芸術都市・京都の創生
～文化芸術によるまちづくり～

二〇一一（平成二三）年　協会は公益財団法人に移行します。会員の親睦や交流を促進する事業から、より積極的に公益事業を展開するとともに、開かれた協会運営が求められることになりました。

二〇一六（平成二八）年　文化庁の京都への全面的移転が決定。

元文化庁長官・近藤誠一理事長は、当時「文化を日本外交の中心に置くべき」として文化外交を推進し、理事長就任の二〇一五年には「京都が先頭に立って、文化芸術の力を社会に浸透させていくことができれば、日本は大きく変わるでしょう」と述べられています。

国の文化政策は、文化芸術の「社会的・経済的価値」を重視する方向に大きく舵を切り、文化芸術を社会を支える重要なインフラとして明確に位置づけました。

二〇一七（平成二九）年　「文化芸術振興基本法」の一部が改正された「文化芸術基本法」では、従前からの文化芸術そのものの振興に止まらず、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業などと連携し、社会的・経済的な活用を推進することが掲げられています。

「現代の日本は政治経済の論理に振り回され、文化芸術の地位が本来あるべきところにない。文化庁の移転は文化行政のあり方や文化芸術の価値を国民が見直す大きなきっかけになる」（理事長 近藤誠一）

【第四期】二〇二一（令和三）年～

文化芸術を軸とした新しいネットワークのハブとして

協会創立四十周年を迎える本年、奇しくも未曽有の新型コロナウイルス感染症パンデミックが起こり、世界的に経済が立ち行かなくなる状況の中、社会における文化芸術の価値が改めて問われています。

四十年間の財団運営、芸術センター指定管理者としての二〇年から様々な課題も見えてきたなかで、今一度立ち止まり、芸文協がこれまで果たしてきた役割を振り返るとともに、これからの時代に果たすべき役割は何かを考える機会とし、村井康彦元理事長を相談役としてプロジェクト委員会を立ち上げ、近藤理事長、建畠館長ら八名の委員で議論を重ねました。

この先、公益法人として持続可能な運営を目指すとともに、「優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市」（『世界文化自由都市宣言』より）を目指す京都市の理想を実現できる組織として、その社会的役割を果たしてまいります。

■編集後記

コロナ禍の影響がこんなに長く続くとは予想も出来なかった。昨年の四月に一回目の緊急事態宣言が出て、全ての美術館が閉館し、多くの町のギャラリーも閉めて展覧会もほとんど見られなくなった。待ちに待った新装の京都市美術館も大々的な披露もなく、寂しく個人で見に行くことになった。日常の業務として一週間に大小、約十個の展覧会を見て回るのがライフワークだった私にとって、自粛期間は本当に耐えがたいものだった。毎日夕刻になると、人の少ないところを探して一時間ぐらい散歩する日々が続いた。

宣言解除後も感染予防のため多数の人が集まることは禁止され、美術館・博物館のプレオープニングが中止となり、その機会に出会える人とも話すことができなくなった。ギャラリーも展覧会は開催しているが訪れる人も少なく、作品を前にして皆と話す機会もほとんどなくなってしまった。それまでの美術体験の積み重なりと広がりが、完全に止まってしまった。宣言の繰り返しによって作家を中心として、ギャラリー・美術館、そしてその受容者である一般大衆が分断され、これまでの美術界の制度やシステムが崩壊するのではと危惧される。これは美術界だけでなく芸術分野、全てにわたって言えることであろう。しかしこの不自由な生活の中で、作品を介して多くの人とコミュニケーションしていたことを改めて認識し、その大切さを確認することになった。

今回のテーマは、今年九月に創立四十周年を向かえる京都市芸術文化協会の、これからを考えることにしました。その中心となった三回のリレートークでは、様々な視点から多くを論じていただきました。これをきっかけに、それぞれの分野で、様々な場所でコミュニケーションを活発にしていただき、その声を協会に届けていただければと思います。

（調査・編集委員長　辻喜代治）

［表紙解説］

京都芸術センター開設20周年記念
「We Age」パフォーマンス
HANAバンド〈はなとブルースの輪〉
（2020年）

お詫び：文化誌『藝文京』140号の発行が遅れ、皆様にはご迷惑とご心配をおかけしましたこと、お詫びいたします。

題字：秋山公道

訃報

当協会会員で京都市立芸術大学名誉教授の山﨑 脩 様が二〇二一年三月十五日にご逝去されました。享年九一歳でした。
彫刻・写真・俳句の分野で活躍され、永年協会の運営にも深く関わっていただきました。
ご遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

最新情報は
WEBサイトをチェック!!

京都市芸術文化協会

京都芸術センター

京都文化芸術総合
オフィシャルサイト
KYOTO ART BOX

京都市芸術文化協会とは

芸術文化に関する調査研究、創造的活動の助成、各種文化事業の実施等を通じて京都市における芸術文化の発展に寄与することを目的として活動しています。併せて「京都芸術センター」の管理運営を行い、様々な芸術活動の支援を行っています。

二〇二一年は協会創立四〇周年。
この先十年の取り組みに向けて、
新たなビジョンを探求します！

調査・編集委員（五〇音順）
伊勢信子・北原春屏・白川 淑・杉山 準・辻 喜代治・中村隆一・藤林由里・横田八重美

文化誌『藝文京』第一四〇号
二〇二一年三月発行
発行：公益財団法人京都市芸術文化協会
〒六〇四―八一五六
京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町五四六―二
京都芸術センター内
電話：〇七五―二一三―一〇〇三
ファックス：〇七五―二一三―一〇〇四
デザイン：大向デザイン事務所

次回予告

特集：創造と想像
～協会創立四〇周年！（仮）
二〇二二年春 発行予定